

マチごとゼロカーボン市民会議 報告書

2023年3月

所沢市
マチごとエコタウン推進課

マチごとゼロカーボン市民会議（第5回）での対話を踏まえて作成した「所沢市の将来像」



マチごとゼロカーボン市民会議 報告書

-目次-

第1章. 背景・目的.....	1
1. 背景-国内外の気候市民会議の現状-.....	1
2. 開催趣旨・目的.....	2
2-1. 開催趣旨.....	2
2-2. 目的.....	2
第2章. マチごとゼロカーボン市民会議の進め方.....	3
1. 実施体制.....	3
2. 参加者の抽出方法.....	3
3. 会議概要.....	6
4. 各会議の記録.....	9
4-1. 第1回.....	9
4-2. 第2回.....	13
4-3. 第3回.....	19
4-4. 第4回.....	25
4-5. 第5回.....	32
第3章. 投票結果.....	40
第4章. まとめ.....	49
1. 成果について.....	49
1-1. 当初の目的に対する成果.....	49
1-2. その他の効果.....	50
2. 課題について.....	51
3. まとめ.....	52
第5章. 講評（早稲田大学 平塚基志氏）.....	53
参考資料.....	56
資料1. 無作為抽出した市民への案内状.....	57
資料2. 参加意向調査のアンケート結果.....	61
資料3. グループワークの結果.....	64
資料4. 投票結果（年代別）.....	131
資料5. 投票結果（地区別）.....	144
資料6. 投票項目の詳細と自由記述一覧.....	158

第1章. 背景・目的

1. 背景 - 国内外の気候市民会議の現状 -

2015年、国際社会は地球上の平均気温の上昇を産業革命以前に比べ2℃より充分低く抑えるというパリ協定に合意し、今世紀後半の早いタイミングでの脱炭素社会実現に向け大きく舵を切った。

脱炭素社会への転換は、エネルギー供給のあり方にとどまらず、産業構造や都市空間・交通システム、ライフスタイルなど、市民の生活に大きな影響を与えることから、その方策や優先順位などについて幅広い視点で検討すること、また市民の理解と参画を得て進めることが必要となる。このため欧州では、2019年ごろから国レベル・自治体レベルで「気候市民会議」が開催されるようになってきた。

気候市民会議とは、無作為抽出などによって社会の縮図となるよう選ばれた数十名～百数十名からなる市民が、地球温暖化対策などについて話し合い、その結果を国や自治体の政策形成に活用するものである。その先駆けとなったフランスの気候市民会議では、149の提案が出され、うち約60の提案をもとに気候・レジリエンス法が成立（2021年8月）、他の提案も既存の法律の見直しや予算化などで検討が行われた。またイギリスでは気候非常事態宣言を行った多くの都市が気候市民会議を開催し、気候行動計画を策定するという動きがみられている。

日本においては、欧州のこのような動きを捉え、2020年11月から12月に北海道大学等による研究プロジェクトとして「気候市民会議さっぽろ2020」が、2021年5月から10月に民間主導による「脱炭素かわさき市民会議」が開催されるなど、市民の参画による気候変動対策と推進の新たなアプローチ方法として関心が高まりつつある。

所沢市は2020年11月に2050年までのゼロカーボンシティ実現を表明し、2022年から所沢市環境審議会（以下、「審議会」という）において「マチごとエコタウン推進計画」の改定の議論を開始するスケジュールだったことから、このプロセスに市民の意見を取り入れる方法として気候市民会議の開催を検討し、2022年8月から自治体主催としては国内初の「マチごとゼロカーボン市民会議」を開催することを決定した。

2. 開催趣旨・目的

2-1. 開催趣旨

地球温暖化の影響は熱波や豪雨、干ばつなどの形で地球全体に表れている。2019年の台風19号では所沢市内でも多くの被害が出て、各所に避難所が開設され、約900名の市民が避難する事態となった。このような自然災害は今後も益々増えるとされており、私たちの生活を脅かす事態になりかねない。

地球温暖化の原因である二酸化炭素の排出を抑制するためには、一人ひとりが当事者としてこの問題を捉え、何をすべきか、何ができるかを考えていくことが重要である。

「まちごとゼロカーボン市民会議」は、選出された市民の皆様に、ゼロカーボンシティの実現に向け、市民生活に関する課題や対策について話し合っただく場として開催した。

2-2. 目的

参加者一人ひとりが地球温暖化問題を自分事として捉え、議論することで、問題意識を共有するとともに、会議結果を所沢市まちごとエコタウン推進計画の改定及びゼロカーボンシティ実現に向けた施策に繋げることを目的とする。

第2章. マチごとゼロカーボン市民会議の進め方

1. 実施体制

主催：所沢市

協力：早稲田大学人間科学学術院

（早稲田大学の協力について）

所沢市は、市内にキャンパスを置く早稲田大学人間科学学術院（以下「早大」）が保有する知的財産をまちづくりの資源として活かし、豊かな地域社会を創造するために、官学連携協定を締結している。早大の持つ知見を活用して、会議をより有意義なものとするとともに、会議の結果を早大と共有し、その成果を市の施策に反映することで、環境分野を始めとした各分野において市民へのフィードバックが図られるよう、早大の協力のもと、市民会議を開催した。

2. 参加者の抽出方法

無作為に抽出した4,500名の市民に「マチごとゼロカーボン市民会議」への参加案内を送付した。（資料1 P57参照）送付に当たっては、先行事例である「気候市民会議さっぽろ2020」及び「脱炭素かわさき市民会議」の参加希望状況において30代以下の参加希望率が低かったことを鑑み、30代以下が多くなるよう年代で傾斜配分し4,500名を抽出した。その結果、587名から返信があり、うち、参加希望の111名から、性別・年代・居住地区・生活の中での温暖化防止への取組状況・市のゼロカーボン施策の認知度などを考慮し、49名の参加市民を選出した。第1回開催後、参加者から諸事情により今後の参加が難しい旨の申し出があったため、繰上げ追加の調整を行い、最終参加市民は51名となった。

51名の構成としては、年代別の参加希望の割合も勘案して参加人数を決定したため、19歳以下は市の人口構成における割合が18.1%のところ、参加者の年齢構成では21.6%と、若年層の割合が高くなっている。年齢以外の項目については、概ね市の縮図といえる範囲となった。また、「地球温暖化対策への取組」については、アンケートの回答者398名と参加者の割合がほとんど同一となる結果となった。（表2-1から2-5並びに図2-1参照、資料2 P61参照）

表 2-1 年齢構成

年齢	人数	割合	市全体の割合
19以下	11人	21.6%	18.1%
20-29	7人	13.7%	12.1%
30-39	9人	17.6%	13.2%
40-49	7人	13.7%	17.1%
50-59	9人	17.6%	17.0%
60以上	8人	15.7%	23.0%
合計	51人	100.0%	100.4%

表 2-2 性別

性別	人数	割合	市全体の割合
男性	27	52.9%	49.4%
女性	24	47.1%	50.6%
合計	51	100.0%	100.0%

表 2-3 居住地区

	人数	割合	市全体の割合
東	16	31.4%	31.7%
西	20	39.2%	34.7%
中央	15	29.4%	33.6%
合計	51	100.0%	100.0%

※居住地区は図 2-1 のとおり、11 ある行政区を東、中央、西で分けした。

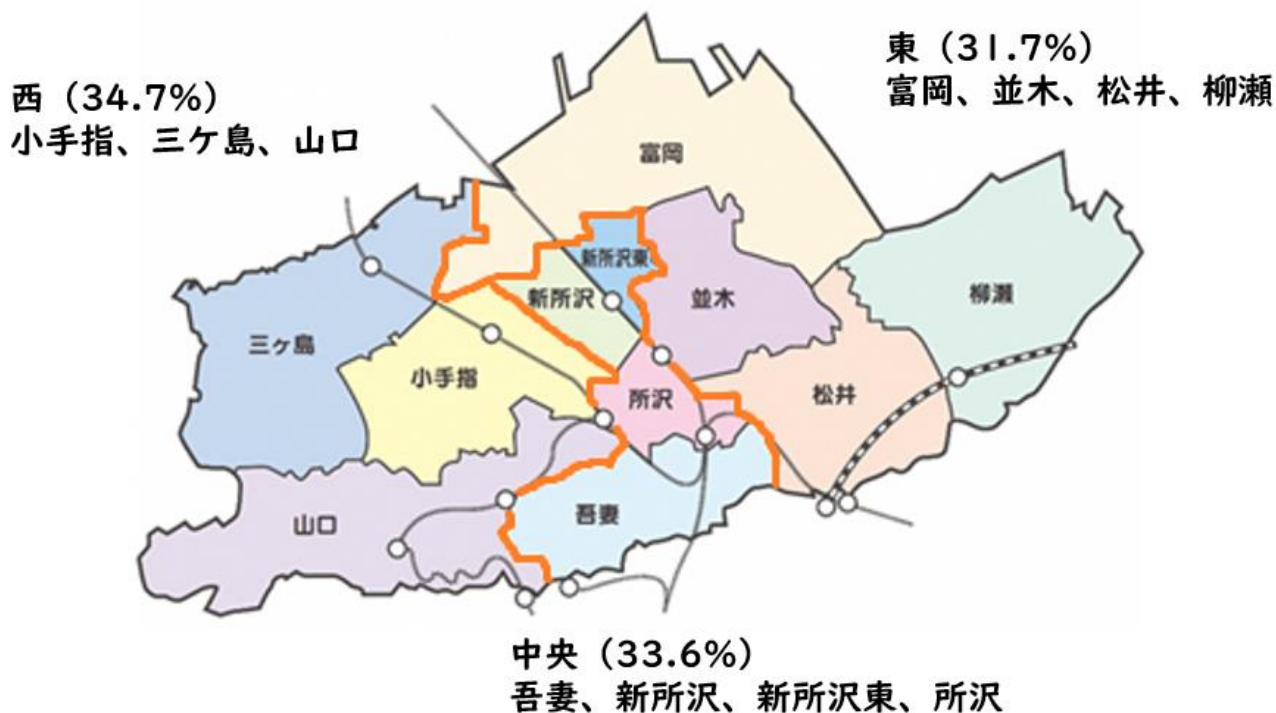


図 2-1 居住地区の分け方 ※ () 内の数値は総人口に対する割合

表 2-4 意向調査票アンケート問Ⅱ（資料 2 P61 参照）への回答状況

問 2 これまでの生活において、地球温暖化対策に取り組んできましたか？

	人数	割合	回答者全体の割合※
はい	41	80.4%	80.2%
いいえ	10	19.6%	19.8%
合計	51	100.0%	100.0%

※回答のあった方398人を母数とした数値です

表 2-5 意向調査アンケート問Ⅰ（資料 2 P61 参照）への回答状況

問 1 2050年までに二酸化炭素排出量を実質ゼロにするため、所沢市では様々な取組みを行っています。次のことについて、あなたが知っていることの文頭の□に✓をつけてください（✓はいくつでも）。なお、全て知らない場合には「全て知らないの」の□に✓をつけてください。

選択肢	人数	割合	R3年市民意識調査の回答結果※
市がゼロカーボンシティ宣言を表明していること	16	31.4%	11.0%
ところざわ未来電力が供給する環境負荷の少ない電力を公共施設で使用していること	10	19.6%	9.8%
ところざわ未来電力が、家庭向けに電力を販売していること	6	11.8%	6.9%
毎月25日を「RE100の日」として本庁舎等の使用電力を再生可能エネルギー100%にしていること	1	2.0%	3.2%
メガソーラー所沢やフロートソーラー所沢を設置し、市域へ再生可能エネルギーの普及を行っていること	11	21.6%	12.8%
家の断熱リフォームや太陽光発電設備、電気自動車等を導入する際の補助制度があること	13	25.5%	23.8%
全て知らない	24	47.1%	55.6%

※5,000人に送付し、2,437人が回答

3. 会議概要

会議は8月から12月まで毎月1回、日曜日の午後1時から午後5時に開催した。第2回から第4回にかけて話し合う6つのテーマについては、初回の対話結果をもとに参加者の承認を得て決定した。司会は平塚基志准教授（早稲田大学人間科学学術院）が行い、全5回のテーマと話題提供者は表6のとおりとした。

グループワークは、あらかじめ性別や年齢のバランスを考慮して分けられたグループで実施した。各グループにはファシリテーター（市職員）とサブファシリテーター（早稲田大学学生）を一人ずつ配置し、議論の進行をサポートした。なお、テーマ1からテーマ6に関する議論は、以下のように進行した。

【テーマ議論の進め方】

- ① 専門家や実践者、市担当部局からの情報提供
- ② グループワーク

（テーマ1～5）

- STEP1 生活の中や地域で取り組んだ方が良いと感じる取組
- STEP2 実施するにあたっての課題
- STEP3 課題への対処方法

（テーマ6）

- STEP1 地域のステークホルダー（関係者）
- STEP2 複数のステークホルダーの連携で実施できるアイデア

- ③ 全体共有

グループワークは基本的に付箋紙と模造紙を使用して行い、①個人ワーク、②グループ内でのシェア、③アイデアの整理とグルーピングの順で進行した。



表 2-6 全 5 回のテーマと話題提供者

日程	内容	話題提供者（敬称略）
第 1 回 8 月 21 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 開催趣旨・目的 ・ 話題提供 「気候変動の現状と脱炭素の必要性」 「ゼロカーボンシティ実現に向けた所沢市の現状」 「カーボンフットプリントからみた所沢市の脱炭素型ライフスタイル」 ・ グループワーク「ゼロカーボンを実現するために普段の生活で取組んだ方が良いこと」 ・ 第 2～4 回で議論するテーマを決定 	<p>所沢市マチごとエコタウン推進課</p> <p>江守正多（国立環境研究所） 所沢市マチごとエコタウン推進課</p> <p>小出 瑠（国立環境研究所）</p>
第 2 回 9 月 25 日	<p>テーマ 1 『商品選択からゼロカーボンを考える』</p>	<p>渡部厚志（地球環境戦略研究機関） 中ノ理子（イオン株式会社） 日橋忠洋（所沢市環境推進員） 所沢市資源循環推進課</p>
	<p>テーマ 2 『食・農からゼロカーボンを考える』</p>	<p>横沢正幸（早稲田大学） 渋谷正則（OEC マルシェ株式会社） 所沢市農業振興課</p>
第 3 回 10 月 23 日	<p>テーマ 3 『エネルギーからゼロカーボンを考える』</p>	<p>松原弘直（環境エネルギー政策研究所） 神藤年三（所沢市自治連合会役員） 所沢市マチごとエコタウン推進課</p>
	<p>テーマ 4 『住まいからゼロカーボンを考える』</p>	<p>外岡 豊（埼玉大学） 上田マリノ（所沢市マチエコアンバサダー） 所沢市マチごとエコタウン推進課</p>
第 4 回 11 月 27 日	<p>テーマ 5 『移動からゼロカーボンを考える』</p>	<p>松橋啓介（国立環境研究所） 井原雄人（早稲田大学） 所沢市都市計画課</p>
	<p>テーマ 6 『地域での連携からゼロカーボンを考える』</p>	<p>島田幸子（環境パートナーシップ会議） 神谷一彦（県立所沢高校）</p>
第 5 回 12 月 18 日	<ul style="list-style-type: none"> ・ 投票結果の共有 ・ 話題提供『里山の利用等』 ・ グループワーク「所沢市の将来像」 ・ グループワーク「対策アイデアの整理」 	<p>所沢市マチごとエコタウン推進課</p> <p>平塚基志（早稲田大学）</p>

【グループワークの結果】

第4回終了後、6つのテーマに関するグループワークの結果から、「進めたい取組」「推進のための具体的な対策」「複数のステークホルダーの連携で実施できるアイデア」について事務局で整理を行い、テーマごとに5件程度、計28件の項目（設問）を作成した。そして28の設問に対し、参加市民の賛同度合および優先度を表明していただく投票を行い、その結果（速報）を第5回で共有した。（第3章及び資料4 P131、資料5 P144 参照）

さらに第5回のグループワークでは、居住地区をもとに構成されたグループ（東〔富岡、並木、松井、柳瀬〕、中央〔吾妻、新所沢、新所沢東、所沢〕、西〔小手指、三ヶ島、山口〕）で、各地区の特性を考慮しながら以下の2点について議論した。

- ① 「所沢市の将来像について」※
- ② 「対策アイデア（28項目）の整理」について

※これまでのグループワークの結果をふまえ早稲田大学で土台のデザインを作成

第5回終了後、議論の結果とその経緯を取りまとめ、参加市民の意見を聴取したうえで「マチごとゼロカーボン市民会議報告書（速報版）」を作成し、令和5年2月の審議会に提出した。



4. 各会議の記録

4-1. 第1回

■日 時 2022年8月21日（日）13:00～17:00

■場 所 所沢市役所 市庁舎高層棟8階大会議室（話題提供者・江守氏はオンライン参加）

4-1-1. プログラム

13:00	20分	開会 藤本市長よりご挨拶 所沢市より趣旨説明	
13:20	15分	チェックイン	グループ内で他己紹介
13:35	35分	「所沢市の好きなところ・魅力だと思ふところ」を話し合おう	グループをまたいで“所沢”を考える（ワールドカフェ）
14:10	10分	休憩	
14:20	55分	話題提供1 江守正多氏より	「気候変動の現状と脱炭素の必要性」 質疑応答
15:15	10分	話題提供2 所沢市マチごと エコタウン推進課より	「ゼロカーボンシティ実現に向けた所 沢市の現状」
15:25	20分	話題提供3 小出 瑠氏より	「カーボンフットプリントからみた所 沢市の脱炭素型ライフスタイル」
15:45	10分	休憩	
15:55	60分	グループワーク	「ゼロカーボンを実現するために普段 の生活で取り組んだ方がよいこと」
16:55	5分	チェックアウト・閉会	連絡事項など

4-1-2. 記録

(1) 開会・市長挨拶・趣旨説明

はじめに、藤本市長による開会挨拶を行い、続いてマチごとエコタウン推進課より会議の趣旨、目的及び会議の構成や進め方等の説明を行った。

(2) チェックイン（他己紹介）

まず各グループ内で2人1組になり、4つ折りにした用紙に「①ニックネーム、②所沢在住歴、③最近のマイブーム、④（市民会議の）招待状が届いてどう感じたか」の4点を書き込んでパートナーに自己紹介し、次にグループ内で相互にパートナーを紹介した。

(3) “所沢”を考える

参加者間の交流とグループワークの練習を兼ねて、



「所沢市の好きなところ・魅力だと思うところ」をテーマとしたグループ討議をワールドカフェ形式で実施した。①各グループでの意見出し、②グループを移動しての情報交換、③元のグループでの意見共有の3つのステップで行い、最後に2つのグループから全体へ向けた発表を行った。

(4) 話題提供1 「気候変動の現状と脱炭素の必要性」(江守正多氏)

「気候変動の現状と脱炭素の必要性」をテーマとして、国立環境研究所の江守正多氏より話題提供を行った。

初めに、地球温暖化の要因と、CO₂の濃度の変化やその他の温室効果ガスの排出状況について解説し、次いで国際社会の約束である、パリ協定での目標について説明した。そして、地球温暖化の影響や被害の見込みを示し、温暖化の影響はCO₂を大量に排出してきた先進国よりも、発展途上国や将来世代により深刻な被害をもたらすという状況を解説した。最後に、世界のエネルギーは再生可能エネルギーを急激に伸ばし、化石エネルギーを削減していく必要があること、日本の排出削減目標は個人の我慢では達成できないことを示し、脱炭素化の実現のためには社会の大転換を起こす必要があることを訴えた。

話題提供の後の質疑応答では、「所沢市への影響」や「世界と日本の温暖化対策への考えの違い」、「私たちができること」などの質問があった。時間の関係で会議の中で回答できなかった質問については、後日文書にて回答した。

(5) 話題提供2 「ゼロカーボンシティ実現に向けた所沢市の現状」(所沢市マチごとエコタウン推進課)

ゼロカーボンシティ実現に向けた所沢市の現状について、マチごとエコタウン推進課より情報提供を行った。これまでの市の政策とゼロカーボンシティ達成の道筋や所沢市域のCO₂の排出状況を解説し、市内の再エネ施設と地域還元の仕組みや、地域新電力事業(ところざわ未来電力)の現状を紹介した。

(6) 話題提供3 小出 瑠氏

カーボンフットプリント(製品やサービスの原料調達から製造、運搬、販売、廃棄までのすべての段階におけるCO₂等の温室効果ガス排出量)からみた所沢市の脱炭素型ライフスタイルをテーマとして、国立環境研究所の小出瑠氏より情報提供を行った。

初めに日本のカーボンフットプリントとセクター別排出量の概要が示され、次いで埼玉県 averages 例としてさいたま市のデータを用いて解説した。さらに、脱炭素型ライフスタイルの4つのアプローチとその選択肢の例を挙げ、削減効果が大きい脱炭素アクションのイメージを「住居、移動、食、消費財・レジャー」の4分類で具体的に示した。最後に、市民の脱炭素アクションを広げていくためには、地域の様々な主体による環境整備が必要で、そのためには行政・自治体の取組が重要であることを説明した。

(7) グループワーク

話題提供を受けて、グループごとに「ゼロカーボンを実現するために普段の生活で取り組

んだ方が良いこと」をテーマとする意見交換を行い、下記のような意見が示された。

〔ごみの削減に関すること〕

- ものを大切にし、不要な物は買わない
- ゴミの分別をする
- ペットボトルからマイボトルへ
- スーパーでリユース容器を活用する
- 3Rの推進

〔移動に関すること〕

- 電気自動車を購入しやすくする
- 空いている駐車場でカーシェアを拡大する
- 徒歩や公共交通利用で貯まるポイント制度の導入
- 自転車道を整備する
- テレワークを推進する

〔農業や食に関すること〕

- 食べ残しをなくし、フードロスを削減する
- 農産物など、地元のものを購入する
- 地産地消を促す専用マーケットの提供と低価格化
- 期限の近い割引商品を選択する
- 高校も毎日給食にして地産地消を推進する

〔省エネに関すること〕

- 省エネ家電への買い替え
- 便座の保温機能を廃止
- ひとつの部屋で、みんなで過ごす
- エコ住宅（窓ガラスの断熱構造、遮光カーテン使用など）
- 家庭の電力見直し窓口の設置

〔再エネに関すること〕

- 自宅にソーラーパネルを設置する
- 市内の小中学校の屋上やプールにソーラーパネルを増築する
- ソーラーパネル設置費用に補助する
- 太陽光パネルの小型化を進め、設置しやすくする

〔その他〕

- みどりを守る
- 自身のカーボンフットプリントを知る
- こどもに対するゼロカーボン、及びその他エコ関連教育
- 選挙の投票でアクションする

(資料3 P63 頁参照)

(8) 講評

グループワークの結果発表を受け、小出氏より講評を行った。

発表では様々な分野の取組が網羅されていた。個人単位での取組や普及啓発だけでなく、設備導入の促進やモノのシェアリングなど、社会システムを変えるという視点が入っていた。こうした観点を取り入れていくことがゼロカーボンの実現に繋がる。

市全体や社会全体で取組が普及するためには、それぞれが取り組むメリットが必要な場合や、無意識的にできた方がよい場合、あるいは自覚的にやらないといけない場合などがある。自分の家族や職場や学校を思い浮かべ、皆が無理なく脱炭素に取り組める方法を考えられたらよい。

取組の優先順位も重要である。2050年脱炭素を考える際、所沢市の状況を踏まえ、そもそもどのように生活の質やニーズを脱炭素で満たしていくことができるか、様々な手段を考えていく必要がある。電気自動車（EV）を例にとれば、EVの購入だけでなく、自転車の利用、テレワーク、EVのシェアリングなどを検討することが考えられる。

日本ではカーボンフットプリントが表示されていることが少ない。表示を目にして考えることで行動が変わり、世の中をどうしていくか議論する場面ができる。所沢市で先進的な取組が始まるとよい。

(9) 次回以降のテーマ

グループワークの発表内容に基づき、司会の平塚氏より、次回以降の会議で取り上げるテーマの案として以下を示した。

「太陽光発電等（再エネ）」「省エネ家電・住宅（住まい）」「公共交通機関の利用（移動）」
「消費・廃棄・農作物の工夫（消費・食・農）」「カーシェア・ライドシェア（地域での連携）」
「その他/里山の利用・普及啓発等」

参加者からは特に追加や異論はなく、この案を踏まえて次回以降のテーマを事務局で整理して準備を進めることが了解された。

(10) チェックアウト・クロージング

グループワークのチェックアウトでは、1人1言の感想を共有した。会議全体のクロージングでは、次回に向けた事務連絡のほか参加者アンケートを実施した。

(11) 閉会



4-2. 第2回

■日 時 2022年9月25日（日）13:00～17:00

■場 所 所沢市役所 市庁舎高層棟8階大会議室

4-2-1. プログラム

13:00	10分	開会 第1回の振り返り	
13:10	10分	チェックイン	参加者の紹介
13:20	30分	テーマ1 『商品選択からゼロカーボンを考える』 話題提供 1 渡部厚志氏より 2 中ノ理子氏より 3 日橋忠洋氏より 4 所沢市資源循環推進課より	1 モノの購入・利用とCO ₂ 2 商品での脱炭素の取組み 3 もったいない市の取組みについて 4 ごみ減量・CO ₂ 削減を考える
13:50	10分	休憩	
14:00	60分	テーマ1 ワーク	グループでアイデア、課題、解決策を話し合い、全体にシェア (発表：偶数番号の4グループ)
15:05	10分	休憩	
15:15	25分	テーマ2 『食・農からゼロカーボンを考える』 話題提供 5 横沢正幸氏より 6 渋谷正則氏より 7 所沢市農業振興課より	5 農業・食に関する影響・適応・緩和 6 食と人とを笑顔でつなげる 7 所沢市の農業
15:40	60分	テーマ2 ワーク	グループでアイデア、課題、解決策を話し合い、全体にシェア (発表：奇数番号の4グループ)
16:40	10分	チェックアウト・閉会	1人1言感想

4-2-2. 記録

(1) 開会・趣旨説明・振り返り

はじめに、第1回市民会議の振り返りを行い、第1回終了後にスライドを用いて参加者から寄せられた意見や要望を共有した。続いて会議の目的や今後の進め方を再確認した。

(2) チェックイン（自己紹介）

第2回から新たに加わった参加者がいることから、



グループ内での自己紹介として、用紙に「①ニックネーム、②最近の良かった出来事、③身近で感じる気候変動の影響」の3点を書き込み、グループ内で共有した。

テーマ1『商品選択からゼロカーボンを考える』

1つ目のテーマは「商品選択からゼロカーボンを考える」とし、①商品選択とカーボンフットプリント、②商品の供給側から、③使用者・消費者側から、④行政の取組という流れで話題提供を行い、続くグループワークで、ゼロカーボンへのアイデアや、それを実施する際の課題と課題への対策について話し合う構成とした。

(3) 話題提供1「モノの購入・利用とCO₂」(渡部厚志氏)

「モノの購入・利用とCO₂」をテーマとして、公共財団法人 地球環境戦略研究機関の渡部厚志氏より話題提供を行った。

カーボンフットプリント(以下、「CFP」)を取り上げ、埼玉県に暮らす人のCFPを減らす行動を紹介した。また、家電、スマートフォン、衣服などの身近なもののCFPを例に挙げ、CFPを減らすための買い方・使い方・捨て方の工夫を排出が多い段階ごとに図示した。

さらに、CFPを減らすための地域の取組例として、リユース容器を用いた宅配サービス「Loop」、地域共通のリユース容器「Megloo」(鎌倉市)、近所での物の貸し借りのプラットフォーム「Rentastic!」、資源活用を軸とした地域活性化(南三陸町)等を紹介した。

最後に、①需要側の気候変動緩和とは行動の変化だけではないこと、②社会規範と嗜好を変えながら、同時にサービスの提供方法を再構築することが排出量とアクセスの削減に繋がること、③変革は社会的・技術的・制度的な変化を通じて起こることを強調した。

(4) 話題提供2「商品での脱炭素の取組み」(中ノ理子氏)

「商品での脱炭素の取組み」をテーマとして、イオン株式会社 環境・社会貢献部の中ノ理子氏より話題提供を行った。

スーパーマーケットという消費者に近い業態の1事例として、イオングループの取組である①PB(プライベートブランド)商品、②食品廃棄物削減、③プラスチック使用量削減の3つの取組を紹介した。①に関しては、持続可能な商品調達のため、グローバル基準に基づく第三者認証を取得した商品を販売していることやトレーサビリティの確保及び消費者への透明性の高い情報発信を挙げた。また、健康・環境への配慮から、肉や乳製品等を植物性の素材に置き換えた商品を展開していることも紹介した。②に関しては、規格外商品の販売及び加工、最新の包装技術を活用した商品の鮮度保持、消費者への呼びかけ等を挙げた。③に関しては、使い捨てプラスチックの削減・素材の切り替え・回収を軸とした具体的な事例を紹介した。

続いて、顧客(消費者)から寄せられた声として、商品の容器や包装、PB商品や資源循環に関する意見を示し、消費者の声が企業の取組を後押しすること、一方そのような消費者はまだ一部であることなどを紹介した。

(5) 話題提供3「もったいない市の取り組みについて」(日橋忠洋氏)

「もったいない市の取り組みについて」をテーマとして、所沢市環境推進員（吾妻地区環境推進員協議会副会長）の日橋忠洋氏より話題提供を行った。

「もったいない市」とは、ゴミ減量を目的とし、再利用できる古着・古布・陶磁器類を持ち寄って必要な人に再配布するイベントである。平成9年に開始し、市内11地区で実施されている。

不用品の配布・再活用は「3R」のうちリデュースとリユースに関連し、また残った陶磁器等をもとに専門業者が「人口砂」を製造することはリサイクルに関連する。このことから、「もったいない市」の実施がごみの増加を抑制し、ごみ焼却に起因するCO₂の排出を減らすことに貢献していることを紹介した。

(6) 話題提供4「ごみ減量・CO₂削減を考える」（所沢市資源循環推進課）

「ごみ減量・CO₂削減を考える」をテーマとして、所沢市資源循環推進課より話題提供を行った。

初めに、所沢市のごみ排出量は、市民の意識や事業者の工夫や地域の協力等もあって減少傾向にあるが、食品ロスと容器包装プラスチックごみの削減が課題であることを説明した。次に利便性と環境負荷のバランスを考えた暮らしへシフトすることの必要性を伝え、課題解決のためのヒントとして、商品選択と暮らしの工夫の例を挙げた。最後に、市民会議の参加者に向けて、柔軟な発想で活発な意見交換をしてほしい旨を伝えた。

(7) テーマ1『商品選択からゼロカーボンを考える』 ワーク

話題提供1～4を受けて、まず司会者が「商品選択からゼロカーボンを考える」というテーマとそれぞれの話題提供の関係を整理して示し、続いてグループ内で意見交換を行った。

ワークは、「①ゼロカーボンへのアイデアを考え共有⇒②取り組むにあたっての課題を考え共有⇒③課題への対策を考え共有⇒④全体共有」という4段階で進めた。

①～③では、「個人ワーク（付箋に記入）⇒グループワーク（共有）」の作業を行い、模造紙に付箋を貼りながら話し合った。①では黄色の付箋、②ではピンクの付箋、③では緑の付箋を用い、意見交換を行った上で各グループの「イチオシのアイデア」を決定した。

(8) テーマ1『商品選択からゼロカーボンを考える』 発表

グループワーク後、4つのグループから全体に向け以下のような発表がなされた。（資料3 P71 参照）

- 旬の食材や買い方など色々な情報について、市役所や民間の発信（Twitter等）はあるが、どこで何に参加できるのかなどの情報が分散しすぎていてわかりづらい。市による統括は難しいが、SNSの活用で課題解決できるのではないか。
- 衣料品のリユースについて、「使い終わったものを他人にあげるだけ」という面が強くなっている。何回使われたのかを示すタグの開発や、リユースに回してもよいのか自分で見極めることが解決策となるのではないか。
- エコ家電の値段が買い替えのネックとなっていることから、買い替えを促すための補

助金制度が解決策となる。

- 商品のCO₂排出量が分からないため、「見える化」として、リサイクル材料の割合や産地、商品が陳列されるまでに排出されたCO₂の総排出量を表示する。
- 販売員の負担やコストがかかる等の課題を解決するため、個々の企業で行うのではなく、統一的なマークや表示規格を作り周知を行う専門の団体を組織する。
- 環境に配慮した商品選択についての認知度向上のため、専用のキャラクター等を用いて発信する。

(9) テーマ1『商品選択からゼロカーボンを考える』 講評

発表後、話題提供者の渡部厚志氏と中ノ理子氏より講評を行った。

〔渡部厚志氏〕

一番大事なのは、よかれと思ってリサイクルしたその先に何が起きているかに想像力を働かせること。いいことをしようとした時に悪い影響があるとしたらどうしたらよいのか、今までの仕組みと違うやり方を企業が行うにはどうしたらよいのか、消費者として企業をどう応援するのか、行政には何を願うのか、今までより想像力を広げてできることを考えるきっかけになる。課題から解決策への繋がり是非常に重要なので、持ち帰って考えてみてほしい。

〔中ノ理子氏〕

参考になる、我々にとっては耳の痛い意見もあった。やっていることをもっとしっかり伝えていかないといけない、伝えきれていないことが非常にたくさんあると感じた。渡部氏の話にもあったが、「あちらを立てれば…」というところもある。何が起こるか、非常に広い視野を持って第一歩を踏み出す一日目かと思う。

テーマ2『食・農からゼロカーボンを考える』

2つ目のテーマは「食・農からゼロカーボンを考える」とし、①農・食への気候変動の影響、②市民からの話題、③行政の取組という流れで話題提供を行い、続くグループワークではワーク1と同様の進行とした。

(10) 話題提供5「農業・食に関する影響・適応・緩和」(横沢正幸氏)

「農業・食に関する影響・適応・緩和」をテーマとして、早稲田大学 人間科学学術院の横沢正幸氏より話題提供を行った。

初めに、気候変動による農業への影響は大きいこと、緩和と適応という対策があることを示した。また、高温による作物の品質への影響の例を紹介し、気候変化による地域収量への影響を解説した。さらに、世界全体における食糧生産への影響について図示した。

続いて、土壌と気候変動の関係として、土壌が「最大の陸上炭素貯蔵庫」となり得ることを示し、併せて生物多様性と気候変動および炭素貯留の関連性について解説した。

問題解決のためには土地利用のあり方を再考する必要があるとし、食料の生産と消費を変えることが気候変動の緩和に貢献する例として、「栄養バランスの取れたカロリー過多で

ない食生活+食品廃棄物の削減⇒温室効果ガス排出を約 1/3 に削減」というシナリオがあり得ること等を示した。

(11) 話題提供 6 「食と人とを笑顔でつなげる」(渋谷正則氏)

「食と人とを笑顔でつなげる」をテーマとして、OEC マルシェ株式会社の渋谷正則氏(所沢ローカルファースト事業団団長)より話題提供を行った。

地域まちづくりの課題として①高齢化、②協力体制構築不足、③実働部隊の不足等を挙げ、それらの解決策が必要であるとした。また、ローカルファースト事業団では「共につながり、地域を育てる。」を運営理念として、地産地消や地域でのお金の循環や雇用創出、街の活性化や魅力向上といった好循環を目指していること、地域資源の PR と地域住民との交流を目的とした活動として、イベントや子どもコミュニティ食堂、プログラム開発などを実施していること等を紹介した。

(12) 話題提供 7 「所沢市の農業」(所沢市農業振興課)

「所沢市の農業」をテーマとして、所沢市農業振興課より話題提供を行った。

市の農業の概要を説明した後、①地産地消のための取組(直売所ガイドマップや地産地消レシピの発行、直売イベントの実施)、②環境にやさしい農業(生分解性マルチフィルムや緑肥植物)、③土に親しむなど「農のあるまちづくり」を進めていること等を紹介した。

(13) テーマ 2 『食・農からゼロカーボンを考える』 ワーク

話題提供 5~7 を受けて、まず司会者が「食・農からゼロカーボンを考える」というテーマとそれぞれの話題提供の関係を整理して示し、続いてグループ内で意見交換を行った。ワークは 1 つ目のテーマと同様に進行した。

(14) テーマ 2 『食・農からゼロカーボンを考える』 発表

グループワーク後、4 つのグループから全体に向け、以下のような発表がなされた。(資料 3 P80 参照)

- 若い世代に取組を知ってもらうため、学校における環境教育を強化するとともに、地域の農産物を学校給食へ活用する
- 費用面の課題は国の補助金等でカバーする
- 地産地消とゼロカーボンの関係が浸透していないので、有名なインスタグラマーなどを活用した PR を行い、認知向上に努める
- 地産地消の情報シェアのため、市域の各駅に「野菜スタンド(野菜の販売所)」を設置する
- 農業のイメージアップのため、農業を楽しめるようなコスチュームを作る
- 牛の飼育に起因する CO₂ 排出量の削減の為、頭数管理やロングライフ牛乳(長期保存可能な殺菌・包装の牛乳)製造などの工夫を行う
- 農業従事者不足を解消するため、農業従事者を公務員にし、生産と収支を安定させる

(15) テーマ2『食・農からゼロカーボンを考える』 講評

発表後、話題提供者の横沢正幸氏と渋谷正則氏より講評を行った。

〔横沢正幸氏〕

個別のアイデア同士の相乗効果もある。結びつけることで効果が倍増する。日本では気候変動対策を楽しみながらやる人の割合が少ないので、そういう人が増えるとよいのではないかな。

〔渋谷正則氏〕

地産地消のキーワードが出てきて嬉しく思う。今日は値段等の問題提起や、最終的にゼロカーボンになるための意見が出ていた。食はなくてはならないものなので、前向きに考えることが地域の笑顔や市の未来に繋がる。

(16) チェックアウト・クロージング

グループワークのチェックアウトでは、1人1言の感想を共有した。全体のクロージングでは、次回に向けた事務連絡のほか参加者アンケートを実施した。

(17) 閉会



4-3. 第3回

■日 時 2022年10月23日(日) 13:00～17:00

■場 所 所沢市役所 市庁舎高層棟8階大会議室

4-3-1. プログラム

13:00	10分	開会・第2回までの振り返り等	
13:10	10分	チェックイン	参加者の自己紹介
13:20	25分	テーマ3 『エネルギーからゼロカーボンを考える』 話題提供 1 松原弘直氏より 2 神藤年三氏より 3 所沢市マチごとエコタウン推進課より	1 ゼロカーボンを実現するための再生可能エネルギーの現状と展望 2 自治会館への太陽光パネル設置への道のり 3 再生可能エネルギーの普及と推進
13:45	10分	休憩	
13:55	60分	テーマ3 ワーク	グループでアイデア、課題、解決策を話し合い、全体にシェア (発表:奇数番号の4グループ)
14:55	30分	テーマ4 『住まいからゼロカーボンを考える』 話題提供 4 外岡 豊氏より 5 上田マリノ氏より 6 所沢市マチごとエコタウン推進課より	4 住まいの対策をどう進めるか 5 ゼロカーボンライフを目指している いろいろやってみた編 6 スマートハウス化推進補助金
15:25	10分	休憩	
15:35	65分	テーマ4 ワーク	グループでアイデア、課題、解決策を話し合い、全体にシェア (発表:偶数番号の4グループ)
16:40	10分	チェックアウト・閉会	1人1言感想

4-3-2. 記録

(1) 開会・趣旨説明・今後の進め方

初めに、第1回と第2回の市民会議の振り返りを行い、参加者から寄せられた意見や要望を共有した。続いて今後の進め方や市民会議の目的、会議結果の反映方法等の再確認を行った。

(2) チェックイン(自己紹介)

グループ内での自己紹介として、用紙に「①ニックネーム、②最近嬉しかったこと」の2点を書き込み、グループ内で共有した。

テーマ3『エネルギーからゼロカーボンを考える』

3つ目のテーマは「エネルギーからゼロカーボンを考える」とし、①再生可能エネルギーの現状と展望、②自治会館への太陽光パネル設置の経験から、③行政の取組という流れで話題提供を行い、続くグループワークで、ゼロカーボンへのアイデアや、それを実施する際の課題並びに課題への対策について話し合った。

(3) 話題提供1「ゼロカーボンを実現するための再生可能エネルギーの現状と展望」(松原弘直氏)

「ゼロカーボンを実現するための再生可能エネルギーの現状と展望」をテーマとして、特定非営利活動法人 環境エネルギー政策研究所 理事・主席研究員の松原弘直氏より話題提供を行った。

初めに、再生可能エネルギーのメリットを挙げ、主なエネルギー源のライフサイクルCO₂排出量を示すことで、長期的なエネルギー転換では、再生可能エネルギーとエネルギー効率化(省エネルギー)だけが将来にわたって持続可能であると説明された。また、「自然エネルギー100%」を目指す国や企業の動きを紹介した。

続いて、世界の再生可能エネルギーの導入状況等を示した上で、日本においてどの再生可能エネルギーを導入するかを考えるために参考となる情報を挙げた。さらに、参加者がより身近に考えるための情報として、埼玉県内の市町村の地域的エネルギー自給率や所沢市のエネルギーフローを図示した。

また、再生可能エネルギーの発電コストや、電力の需給調整の実例、導入適地等の具体的な解説も加え、ソーラーシェアリングと呼ばれる営農型太陽光発電について紹介した。

最後に、再生可能エネルギー100%の未来を目指すために重要となる「知ること・参加すること・考えること・実行すること」を例示して結びとした。

(4) 話題提供2「自治会への太陽光パネル設置への道のり」(神藤年三氏)

「自治会館への太陽光パネル設置への道のり」をテーマとして、所沢市自治連合会役員・所沢市環境推進員の神藤年三氏より話題提供を行った。

所沢市の町谷自治会館に7年前に太陽光パネルを設置するまでの経緯について、太陽光発電のプラスの側面(売電収入による資産運用、災害時の緊急電源)を理由として修繕費を積極的に活用する方針をとったこと、当初は住民の反応が消極的だったこと、住民の懸念点を解消するための取組(臨時総会での説明)等を説明した。今年に入り、当初の想定より約3年前倒しで初期投資額の回収を達成したことも併せて紹介した。



(5) 話題提供3「再生可能エネルギーの普及と推進」(所沢市マチごとエコタウン推進課)

「再生可能エネルギーの普及と推進」をテーマとして、所沢市マチごとエコタウン推進課

より話題提供を行った。

初めに、所沢市の太陽光発電利用可能量を挙げ、戸建住宅と遊休農地の割合が高いことを示した。この他、市内の再生可能エネルギー設備の現状を挙げ、設備数や出力数が増加傾向にあることを説明した。

続いて、「メガソーラー所沢」と「フロートソーラー所沢」の概要やソーラーシェアリングの事例を紹介した。また、平成30年に設立した「株式会社ところざわ未来電力」の事業概要と電源構成を図示し、「メガソーラー所沢」と「フロートソーラー所沢」による電力や売電収益の利活用の仕組みを説明した。

(6) テーマ3『エネルギーからゼロカーボンを考える』 ワーク

話題提供1～3を受けて、まず司会者が「エネルギーからゼロカーボンを考える」というテーマとそれぞれの話題提供の関係を整理して示し、特に「日常生活で自分事としてできることは？」という視点が大切であることを説明し、続いてグループ内で意見交換を行った。

ワークは、「①ゼロカーボンへのアイデアを考え共有⇒②取り組むにあたっての課題を考え共有⇒③課題への対策を考え共有⇒④全体共有」という4段階で進めた。今回から、取り組む主体が「自分」なのか「他の誰か・組織」なのかを明確にして考え、特に「自分」を重視して検討を深めることを目指した。

①～③では、「個人ワーク（付箋に記入）⇒グループワーク（共有）」の作業を行い、模造紙に付箋を貼りながら話し合いを進めた。①では黄色の付箋、②ではピンクの付箋、③では緑の付箋を用いた。個人のアイデア等を共有する際には、類似するアイデア等があればその都度近くに付箋を貼り、おおまかなグループを作っていく手法を取った。

(7) テーマ3『エネルギーからゼロカーボンを考える』 発表

グループワーク後、4つのグループから全体に向け以下のような発表がなされた。（資料3 P89 参照）

- 「株式会社ところざわ未来電力」の認知度が低いため、市の広報の一面に載せる、商品券の発行などの加入メリットを作るのはどうか
- 再エネの普及などの市の施策における資金不足と人手不足を補うために、次世代を担う大学生や中高生などにボランティア活動として市の事業を手伝ってもらい、将来的に活動できるような体制を今から作っていく
- 太陽光パネルの未設置者は費用面の負担が大きいと推察できるため、補助金制度などの情報を発信する
- 再エネ導入や環境にやさしい電気への切り替えなど、多様な課題に対する相談を一挙に引き受ける生活相談窓口のようなものを、市に作ってほしい

(8) テーマ3『エネルギーからゼロカーボンを考える』 講評

発表後、話題提供者の松原弘直氏と神藤年三氏より講評を行った。

〔松原弘直氏〕

短時間のうちに自分事として考え、改善策まで生まれて素晴らしい。行政の声掛けで始まったこの議論、行政としてやってほしいことはたくさんあると思う。それは市民の立場としてしっかり意見を言ってもらい、行政の方で計画をきちんと作ってもらおう。以前は電力会社やガス会社に頼ってやらせてもらえばいいという風潮があったが、今は地域で自ら作り出していく時代になりつつある。行政と市民が協働して進めていくこの試みを続けてほしい。

次に、私たちは消費者でもあるので、企業との関係でもできることがある。電力の切り替えや、エネルギーを使って作り出されているものに対し、消費者の立場で色々なことを考え企業にフィードバックしていく。市内の企業と組むなど、どんどんアイデアを出してほしい。「できないこと」を探すのはすぐできる。今は「できる」時代なので、「できること」を真剣に考えて取り組んでほしい。

〔神藤年三氏〕

小中学校での取組に関して、ミヤコタナゴ（魚）への餌やりのボランティアを山口地区で行う動きがある。このように、学校教育の中に自然を取り入れて子供に自然の大切さを教えていくのも大切だ。機会があれば参加してほしい。

テーマ4『住まいからゼロカーボンを考える』

4つ目のテーマは「住まいからゼロカーボンを考える」とし、①住まいをタイプ別に整理、②住まいでの対策検討・実施の経験、③行政の取組という流れで話題提供を行い、続いてグループワークを行った。

(9) 話題提供4「住まいの対策をどう進めるか」(外岡 豊氏)

「住まいの対策をどう進めるか」をテーマとして、埼玉大学名誉教授の外岡 豊氏より話題提供を行った。

初めに、気候変動対策に関する概説を行い、とりわけ住宅の省エネと再生可能エネルギーの導入を最速・最大限に推進する必要性があるとした。ただし世界情勢の変動等により、実際の削減方法や実現可能性については非常に見通しが難しい状況であると述べた。

続いて、住宅のCO₂排出量とエネルギー消費量の長期動向を示し、所沢市における世帯類型別・戸建集合別の住宅のエネルギー消費量を紹介した。温暖な所沢市では暖房の負荷が比較的小さいこと、若年単身世帯が比較的多いこと等の特徴から、世帯CO₂排出量は全国値より低めであると解説した。

後半では、住宅のライフサイクルCO₂ (LCCO₂) の観点に基づく選択（戸建か集合か／新築か改修か空き家利用か）を取り上げた。住宅からのCO₂排出量削減のために望ましい考え方を挙げる一方で、現行の税制や法規がその妨げとなっている現状についても説明した。

最後に、住宅の電力消費の構成（内訳）を示し、節電のために家庭でできること、より効果が高く経費も安い対策、「エコな住宅」を考えるヒント等を紹介した。

(10) 話題提供 5 「ゼロカーボンライフを目指していろいろやってみた編」(上田マリノ氏)

「ゼロカーボンライフを目指していろいろやってみた編」をテーマとして、所沢市マチエコアンバサダーの上田マリノ氏より話題提供を行った。

上田氏自身がこれまでに実践してきた取組を、「すぐできる度」と「影響力」の2つの指標と併せて紹介した。再エネ電気への切り替え、窓の断熱等の具体的な取組の他、モチベーションを保つための方法として、①積極的に情報をとりにいく、②イベントや講座に参加する、③相談できる仲間を作るということも効果的であるとした。

(11) 話題提供 6 「スマートハウス化推進補助金」(所沢市マチごとエコタウン推進課)

「スマートハウス化推進補助金」をテーマとして、所沢市マチごとエコタウン推進課より話題提供を行った。

「所沢市スマートハウス化推進補助金」の概要を説明し、対象となる「エコリフォーム」・「創エネ・蓄エネ機器導入」の要件と交付実績を紹介した。また、補助金の具体的な利用例を挙げて、家庭での省エネ効果(CO₂の削減効果)や光熱費の節減等のメリットを示した。

(12) テーマ4『住まいからゼロカーボンを考える』ワーク

話題提供4~6を受けて、まず司会者が「住まいからゼロカーボンを考える」というテーマとそれぞれの話題提供の関係を整理して示し、続いてグループ内で意見交換を行った。

ワークはテーマ3と同様の流れで進行した。



(13) テーマ4『住まいからゼロカーボンを考える』発表

グループワーク後、4つのグループから全体に向け以下のような発表がなされた。(資料3 P98 参照)

- 所沢市自体が暑いと感じるため、ヒートアイランド現象の解決策として「緑の条例」を作り、道路、集合住宅(壁面・屋上)、戸建住宅などを対象に、都市全体を緑化する
- 中古住宅へのネガティブなイメージを払拭するため、「古民家」などお洒落な言い方にしてみる
- 省エネ行動推進の課題として、知識が不十分、モチベーションの維持や家族間の考え方の共有が難しい等があるため、解決策として「省エネチェックリスト」やエコポイント制度を作り、市の名産品を特典にして地産地消にも繋げる
- 生活のなかでCO₂排出量を削減するため、できるだけ屋外で過ごし、化石燃料を使わない移動手段(徒歩・自転車)を選択する
- エコなライフスタイルを促進するため、市と企業がタイアップし、徒歩や自転車での移動量に応じてポイントがたまるアプリを作る。さらに再エネ活用施設等を利用するとポイントを加算する仕組みも設ける

(14) テーマ4『住まいからゼロカーボンを考える』 講評

発表後、話題提供者の外岡 豊氏より講評を行った。

所沢市は内陸部にあるので寒暖差が大きい。季節移住・地域間交流をしてみてもどうか。

中古住宅について、海外には環境性能が高い住宅は高く売れるという認証制度がある。高く売れる住宅を作り維持するという認識がある。

省エネ行動は皆で考えないといけない。たとえば「所沢方式」の省エネキャンペーンを考えてみてほしい。

住宅のエコリフォームについては建築士会連合会によるアドバイスの動きもある。また、不動産屋でエコな貸家はないかと聞くのもよい。この市民会議をきっかけに、市民が自ら考える市民討論団を作り、所沢方式の取組をぜひ進めてほしい。

(15) チェックアウト・クロージング

グループのチェックアウトでは、1人1言の感想を共有した。全体のクロージングでは、次回に向けた事務連絡のほか参加者アンケートを実施した。

(16) 閉会

4-4. 第4回

■日 時 2022年11月27日(日) 13:00～17:00

■場 所 所沢市役所 市庁舎高層棟8階大会議室

4-4-1. プログラム

13:00	10分	開会・第3回までの振り返り等	
13:10	10分	チェックイン	参加者の自己紹介
13:20	30分	テーマ5 『移動からゼロカーボンを考える』 話題提供 1 松橋啓介氏より 2 井原雄人氏より 3 所沢市都市計画課より	1 移動のゼロカーボン 2 モビリティによる脱炭素化への選択肢 3 楽しく、そしてエコに暮らそう！
13:50	10分	休憩	
14:00	65分	テーマ5 ワーク	グループでアイデア、課題、解決策を話し合い、全体にシェア (発表:奇数番号のグループ)
15:05	20分	テーマ6 『地域での連携からゼロカーボンを考える』 話題提供 4 島田幸子氏より 5 神谷一彦氏より	4 パートナースhipで取り組む所沢市 マチごとゼロカーボン 5 高校生を地域で活かす！
15:25	10分	休憩	
15:35	40分	テーマ6 ワーク	グループで地域のステークホルダー(関係者)を挙げる、ステークホルダーの連携でできるアイデアを話し合い、全体にシェア (発表:偶数番号のグループ)
16:15	35分	今後の進め方	投票の進め方、とりまとめの説明・協議
16:50	10分	チェックアウト・閉会	1人1言感想

4-4-2. 記録

(1) 開会・振り返り・今後の進め方

初めに、これまでの市民会議の振り返りを行い、参加者から寄せられた意見や要望を共有し、続いて今後の進め方や市民会議の目的、会議結果の反映方法等の再確認を行った。

(2) チェックイン(自己紹介)

グループ内での自己紹介として、用紙に「①ニックネーム、②所沢市内のおすすめの場所、お店、その他」の2点を書き込み、グループ内で共有した。

テーマ5『移動からゼロカーボンを考える』

5つ目のテーマは「移動からゼロカーボンを考える」とし、①移動のゼロカーボン、②モ

ビリティによる脱炭素化への選択肢、③行政の取組という流れで話題提供を行い、続くグループワークで、ゼロカーボンへのアイデアや、それを実施する際の課題並びに課題への対策について話し合う構成とした。

(3) 話題提供 1 「移動のゼロカーボン」(松橋啓介氏)

「移動のゼロカーボン」をテーマとして、国立環境研究所の松橋啓介氏より話題提供を行った。

初めに、所沢市の1人当たりの年間乗用車CO₂排出量は、全国平均と比較すると少ないことを説明した。自家用乗用車は、輸送量当たりCO₂排出量が比較的高い交通手段であることから、なるべく使用を少なくすることが求められる。所沢市は「人口密度が高い・施設等が近い・公共交通が整っている」という都市構造であるため、「移動距離が短くて済む・徒歩や自転車利用が多い・鉄道利用機会が多い」という特徴があるとした。

続いて、脱炭素社会の実現に向けては、ここ10年の傾向や20年先の予測・計画が急激に変化していることを踏まえつつ、大幅削減を前提にバックキャストで社会の構造変化を考える必要があることを図示した。日々の地道な努力の啓発や燃費の良い車の選択等を誘導する制度整備に加えて、「公共交通や徒歩が使いやすいまちにする」・「環境負荷の小さい選択が得をする仕組みにする」といった地域社会への働きかけと、その際の(本会議のような)市民参加が重要であるとした。

また、移動のゼロカーボンにおいては、供給側の対策のみでの大幅削減には限界があり、消費側の対策を組み合わせることで大幅削減が可能になるとした。さらに、欧州の市民会議における政策アイデアの例や、「便利なまち」(移動距離が少なく済む+電気自動車の普及、公共交通で拠点を結ぶ+徒歩・自転車の組み合わせ等)の考え方を紹介した。

(4) 話題提供 2 「モビリティによる脱炭素化への選択肢」(井原雄人氏)

「モビリティによる脱炭素化への選択肢」をテーマとして、早稲田大学スマート社会技術融合研究機構 電動車両研究所 客員准教授の井原雄人氏より話題提供を行った。

初めに、「モビリティ(移動しやすさ、移動性、移動の仕組み)」と「ヴィークル(乗り物、移動手段)」を定義し、脱炭素を目指すには、前者に関しては乗り物の使い方を変え、後者に関しては乗り物自体を変えていくことになることを説明した。

これに関し、電気自動車で使用する電気が何によって発電されたものかなど、動力源に使うエネルギーの作り方も重要であることを示した。また大人数が乗車できるバスや鉄道について、もし乗り合う人が少なければ、1人当たりのCO₂排出量は悪化することを示した。

これらを踏まえ、バスについて、①電動化した際の車両1台当たりのCO₂削減量と②乗合を促進することによるCO₂削減量を比較した。

最後に、移動に関わるCO₂削減の方法として、生活習慣の転換、公共交通の利用促進、車両の電源化と性能向上、充電のための再エネの導入促進等を挙げた。

(5) 話題提供3「楽しく、そしてエコに暮そう！」所沢市都市計画課

「楽しく、そしてエコに暮らそう！」をテーマとして、所沢市都市計画課より話題提供を行った。

初めに、所沢市の移動と公共交通の課題として、①生活のための移動手段の確保、②公共交通の利便性の向上、③自家用車からの転換と公共交通利用の促進の3点を挙げた。公共交通を使いやすくして積極的に使ってもらうことで環境負荷を減らすという目標を示し、「クルマに依存しない、歩いて楽しいまちづくり」を目指す取組を行うとした。

併せて、所沢市の公共交通について、概要、カバー率、利用者数の推移等のデータを示した。

(6) テーマ5『移動からゼロカーボンを考える』 ワーク

話題提供1～3を受けて、まず司会者が話題提供のポイントを整理して示した。話題提供1では「市民、事業者、行政という異なる立場で（&連携で）、そして対策による時間軸を踏まえて」、話題提供2では「移動の対策メニューを見ながら、日常生活で変化できることを見つける」というポイントを確認したうえで、グループ内で意見交換を行った。



ワークは、「①ゼロカーボンへのアイデアを考え共有⇒②取り組むにあたっての課題を考え共有⇒③課題への対策を考え共有⇒④全体共有」という4段階を進めた。その際、取り組む主体が「自分」なのか「他の誰か・組織」なのかを明確にし、特に「自分」を重視して、自身の生活を踏まえて「自分ごと」として考えを深めることを目指した。

①～③では、「個人ワーク（付箋に記入）⇒グループワーク（共有）」の作業を行い、模造紙に付箋を貼りながら話し合いを進めました。①では黄色の付箋、②ではピンクの付箋、③では緑の付箋を用いた。個人のアイデア等を共有する際には、①では各自が順番に付箋をファシリテーターに渡し、ファシリテーターがグループ内にシェアしながら模造紙に貼っていく方法をとった。また、②及び③では各自が付箋の内容を説明しながら直接模造紙に貼っていく形とした。

(7) テーマ5『移動からゼロカーボンを考える』 発表

グループワーク後、4つのグループから全体に向け以下のような発表がなされた。（資料P107参照）

- 徒歩移動を増やす上で、歩道が不便という課題があるため、段差など危険な場所を近隣住者から聞き取り、歩道の整備を進める
- 徒歩移動を促すために、ポイントやプレゼントなど報酬を付与する
- 自動車の渋滞回避に向け、交通規制や学校や駅周辺でのマイカー規制などを実施する

- 自転車利用を促進するため、行政は自転車専用レーンの設置や道路の凹凸の補修を行う
- 公共交通機関がより利用しやすくなるよう、電車とバスのスムーズな接続のためダイヤを見直す
- 車は悪者で廃止するというのではなく、家庭で一日だけでも車に乗らない日・公共交通を利用する日を作る
- 道路の整備に関する資金調達にクラウドファンディングを活用する
- 歩いて楽しいまちのために、治安が良くて景色が楽しめるまちにする。また、日替わり・週替わりでイベントが行われたりお店が入れ替わったりなど、飽きが来ない工夫をする
- 大規模マンション群の空いた駐車場などのスペースで、カーシェアリングやシェアサイクルの導入やマルシェの開催を検討しているが、セキュリティ面の課題で住民の理解が得られないため、セキュリティ面の強化・改善を進める

(8) テーマ5『移動からゼロカーボンを考える』 講評

発表後、話題提供者の松橋啓介氏と井原雄人氏より講評を行った。

〔松橋啓介氏〕

「(対策のための) お金があまりないだろう」という話があったが、炭素税のような制度が既に検討されていて、そこで集めたお金を一人ずつ一定額配ったり、徒歩に対するポイント付与や電気自動車への補助金に使ったりするなど、使い道(何にお金を払ったらいいか)を決める時に皆さんの意見は参考になる。

歩行者の信号待ちが長い、歩行者が危険だという点は市に対策を頑張ってもらいたい。

公共交通が不便という点について、コミュニティバスに比べて路線バスにはあまりお金が出されていない。海外では自治体が3~7割お金を出している例もある。乗り継ぎしやすくするための対策などを市などが応援していただけたらよい。

現在ガソリン代が高騰しているが、そこに炭素税が加わったとき、自家用車の乗車距離や回数が減ったりカーシェアが増えたりする可能性がある。また、集合住宅に電気自動車のカーシェアがあれば駐車場がそれほどなくてもよく、建て替えの際にお金がかからずに済むといった政策もできたらよい。

高齢になり運転できなくなった時の議論があまりなかった。ネットスーパーや電動車椅子を使いやすくすることや、安く住み替えできる場所の提供などが今後課題になるのではないかと。

〔井原雄人氏〕

徒歩について、「たくさん歩くと健康になる・医療費が下がる」ということや、「公共交通が発達している都市ほど色々な疾病にかかる割合が低い」という点については、統計的に色々なデータを積み重ねて実証が進められている。歩ける環境を増やすことはCO₂削減にも健康にもよいし、お金の面でも、医療や福祉の分野に与えるインパクトが大きいので、取り組んでいくとそちらの方から予算が出てくるのではないかと個人的には思っている。

テーマ6『地域での連携からゼロカーボンを考える』

6つ目のテーマは「地域での連携からゼロカーボンを考える」とし、①地域でゼロカーボンを進めるには多様な主体の連携が有効であることの説明と取組事例、②高校生と地域の主体が連携した地域を元気にする取組事例に関する話題提供を行い、グループワークでは、地域のゼロカーボン実現に向けたステークホルダーを挙げ、その連携でできるアイデアについて話し合う構成とした。

(9) 話題提供4「パートナーシップで取り組む所沢市マチごとゼロカーボン」 島田幸子氏

「パートナーシップで取り組む所沢市マチごとゼロカーボン」をテーマとして、一般社団法人環境パートナーシップ会議の島田幸子氏より話題提供を行った。

初めに、「地方環境パートナーシップオフィス（地方EPO）」の紹介を行い、その設立目的である「持続可能な社会の構築」に関連して、持続可能な開発目標（SDGs）について解説した。また、持続可能な地域社会においては、多様な主体による協働取組が地域課題を同時解決することや、サステナビリティへの理解促進が地域資源の循環型利用促進につながるといったイメージを示した。

さらに、取組の始まりはその地域に主体性のある誰かであり、重要なポイントとして、「ひとり」や「ひとつの組織」だけでは絶対に実現できないという点を挙げ、課題・テーマのつながりから「人」を見つけ、パートナーシップや協働取組につなげるプロセスを説明した。

最後に、実践例として熊本県水俣市の「ごみ減量女性連絡会議」、静岡市の「しずおか校庭芝生化応援団」等の4つの取組を紹介した。

(10) 話題提供5「高校生を地域で活かす！」 神谷一彦氏

「高校生を地域で活かす！」をテーマとして、県立所沢高校教諭の神谷一彦氏より話題提供を行った。

初めに、所沢高校のインターアクトクラブの活動例として、地域の森林や河川の保全活動、農業ボランティア、海外の高校との交流など、地域奉仕と国際交流の2つを柱とした活動を紹介した。

また、「総合的な探究の時間」の活動として生徒それぞれが課題を発見して解決に取り組む「マイプロジェクト」の例を紹介した。このほか、同校の同窓会による在校生支援活動「THis（株式会社所沢高校）」も挙げた。

高校生が地域の活動に参加することは、高校生と地域の双方にとってメリットが多い。両者を繋げるためには、社会に開かれた学校づくりと中高生を受け入れる地域づくりの2点が重要であるとし、それぞれのポイントを挙げた。

(11) テーマ6『地域での連携からゼロカーボンを考える』 ワーク

話題提供4・5を受けて、まず司会者が「地域での連携からゼロカーボンを考える」というテーマとそれぞれの話題提供の関係を整理して示し、続いてグループ内で意見交換を行った。

ワークは、「①地域のステークホルダー（関係者）を挙げ共有⇒②複数のステークホルダーの連携で実施できるアイデアを考え共有⇒③全体共有」という3段階で進めた。

①・②では、「個人ワーク（付箋に記入）⇒グループワーク（共有）」の作業を行い、模造紙に付箋を貼りながら話し合いを進めた。①では黄色の付箋、②ではピンクの付箋を用いた。個人のアイデア等を共有する際には、各自が付箋の内容を説明しながら直接模造紙に貼っていく形とした。

(12) テーマ6『地域での連携からゼロカーボンを考える』 発表

グループワーク後、4つのグループから全体に向け以下のような発表がなされた。（資料3 P115 参照）

- フードロス削減に向けて、SNS とママ友と商店を掛け合わせて何かできるのではないかな
- 行政・企業頼みではなく、「人のつながり」をキーワードに自分たちの周りから変えていけるのではないかな
- 学習塾やスポーツクラブでフードロスや制服の寄付に取り組んでみてはどうか
- 様々な団体の取組を、市役所や公民館の広報を通じて周知していくことで、地域全体が盛り上がるのではないかな
- 太陽光パネル設置会社と西武鉄道や西武バスが連携して、ソーラーパネルカーの「ところタクシー」を開発する
- スポーツジムと太陽光パネル設置会社で発電機能のある施設をつくり、トレーニングが発電に繋がる仕組みを作ってはどうか



(13) テーマ6『地域での連携からゼロカーボンを考える』 講評

発表後、話題提供者の島田幸子氏と神谷一彦氏より講評を行った。

〔島田幸子氏〕

ワークがうまくいくか、付箋はたくさん出てくるのかと心配していたが杞憂だった。それぞれ地域の中にどんな人がいるのか、その人の強みは何なのかを考え、強みと強みを掛け算することで新しい取組のアイデアがたくさん出ていた。所沢市の中にいる人たちが自ら「マチごとゼロカーボン」に進んでいくために考えることができたのではないかなと思う。

〔神谷一彦氏〕

こんなにステークホルダーがたくさんいて、グループによって出てくる型が違う。それぞれが持っているリソースも違うということが面白かった。

主体性がキーワードになっている。自治体をお願いするのではなく、自分たちで思いついたことをやってみることが大事だ。市もそれを待っているのかとも思う。ぜひ具体化するとよい。

(14) アンケート形式の投票と今後の進め方について

第4回市民会議終了後に、これまでに参加者から出された提案内容（テーマ1～6）に基づき、実施するアンケート形式の投票について、投票の目的、設問の作成プロセス、構成及び回答方法等をまちごとエコタウン推進課より説明した。続いて、第5回目の進め方及び全5回のとりまとめ方針について司会より説明した。

その後、参加者から質問や意見を募ったところ、多数意見があり、いただいた意見は投票項目作成の参考とした。

(15) チェックアウト・クロージング

グループのチェックアウトでは、1人1言の感想を共有した。全体のクロージングでは、次回に向けた事務連絡のほか参加者アンケートを実施した。

(16) 閉会

4-5. 第5回

- 日 時 2022年12月18日(日) 13:00～17:00
- 場 所 所沢市役所 市庁舎高層棟8階大会議室

4-5-1. プログラム

13:00	10分	開会・副市長挨拶・ これまでの振り返り	
13:10	15分	チェックイン	参加者の近況シェア
13:25	10分	投票結果の共有 所沢市マチごとエコタウン 推進課より	
13:35	15分	投票結果についての感想共有	
13:50	10分	テーマ『里山の利用等』 話題提供 平塚基志氏より	里山はCO ₂ を吸収するのか？地域で里山を 活かすには？
14:00	15分	休憩	
14:15	55分	ワーク1『所沢市の将来像につ いて』	グループで話し合い、全体にシェア
15:10	15分	休憩	
15:25	60分	ワーク2『対策アイデアの整理』	グループで話し合い、全体にシェア
16:25	20分	チェックアウト	1人1言感想
16:45	10分	講評 所沢市長	
16:55	5分	閉会	感謝状の贈呈、参加者アンケート

4-5-2. 記録

(1) 開会・副市長挨拶・振り返り

初めに、中村副市長より挨拶を行った。続いてこれまでの市民会議の振り返りを行い、参加者から寄せられた意見を共有した。また、第5回の進め方について、居住地区に応じて割り振られた6つのグループ（東1、東2、中央1、中央2、西1、西2）に分かれ、各地区の特徴を踏まえて対話を行っていくことを説明した。

(2) チェックイン（自己紹介）

チェックインとして、グループ内での自己紹介を実施した。用紙に「①ニックネーム、②居住地区の特徴（好きなどころ）、③ちょっと進んだゼロカーボン」の3点を書き込み、グループ内で共有した。

(3) 投票結果の共有と感想の共有

第4回市民会議の後に実施した投票（6テーマ・



全 28 施策)の結果について、マチごとエコタウン推進課より説明を行った(資料 4 P131 参照)。

これを受けて、結果についての感想をグループ内で共有した。感想はサブファシリテーターが付箋にメモし、模造紙に貼っていく形とした。

(4) 話題提供「里山は CO₂を吸収しているのか?地域で里山を活かすには?」(平塚基志氏)

市民会議の最後のテーマである「里山の利用等」について、「里山は CO₂を吸収しているか?地域で里山を活かすには?」をテーマとして、早稲田大学人間科学学術院の平塚基志氏より話題提供を行った。

初めに、北半球の CO₂濃度が変動していることを図示し、その理由として森林が CO₂を吸収する倉庫の役割を果たしていることを説明した。これに関し、所沢市の森林面積は減少傾向にあること、いわば倉庫が満杯に近づいている状況であること、1960~1970 年代と比較すると森林内の太陽光や林床植生などのモザイク構造が減っていること(里山の均一化)などを解説した。

続いて、落葉の利用によるカーボンの貯蔵の事例(武蔵野の落ち葉堆肥農法)について、里山から落葉を持ち出し、堆肥化して農地で活用する場合、里山では CO₂の吸収と排出の収支が合い、農地では CO₂吸収を増加させることができることを示した。

最後に、里山が提供している多くのサービス(里山の効用)に関し、生物多様性の保全や地球温暖化対策、地域住民の生活や木材生産などの全ての機能を同時に向上させることは難しく、地域に適したバランスを維持することが重要になることを解説した。

(5) ワーク 1『所沢市の将来像について(マチごとゼロカーボン将来像)』

ワーク 1では、所沢市の将来像について、模造紙に貼られた大判のイラスト「マチごとゼロカーボン将来像案」(図 4-1)を用いて対話を行った。

ワークは、「①将来像案を確認⇒②将来像案への気づきを共有⇒③将来像案の改善を付箋で加える⇒④全体共有」という 4 段階で進化した。

①では将来像のイラストをグループ全員で見ながら、投票項目が反映されているか、これまでの対話の内容が反映されているか等を確認し、②では地区の特徴を踏まえて追加すべき点や困難な点を挙げ、「自分が実際に行うには」という視点からの意見交換を行った。③では、②の意見を反映し、将来像の改善点を付箋で示した。

(6) ワーク 1『所沢市の将来像について(マチごとゼロカーボン将来像)』 発表

グループワーク後、全グループが「地区の特徴を踏まえての改善」を中心に、全体に向けて発表した。

なお会議後、各グループで出された改善点を反映し、図 4-2 の将来像を作成した。

[東地区]

- 将来像案からは教育が欠落しているので、ゼロカーボンに関する教育を補完してほしい
- モビリティの削減が大きなテーマになっているが、東地区では車を無視できない。歩行

者・自転車優先といっても、マナーも含めきちんと教育していく必要がある

- 車に乗る人が白い目で見られると分断につながる。車との共存が大前提にあるべきで、車を使いたい人の意見も併記すべき
- パークアンドライドなどの仕組みを考えてもいいのではないか
- 東地区は住宅街でもなく山があるわけでもない土地柄で、平坦であり、畑やちょっとした森が多い。地域の住民と企業とが協働して畑をうまく利用したり蜂を育てたり、企業の協力のもと工場の屋根に太陽光パネルの設置を推進するという意見が出た
- 乗り物に関しては、空飛ぶ車（ドローン）や自動運転など近未来の乗り物をどんどん推奨する。電動車の普及に伴いマンションに充電施設を設けていくという意見が出た

[中央地区]

- 市街地で色々なお店があり、車を使わなくても生活しやすい地域である
- 自転車が通れる道があまりないため、車が通れない徒歩・自転車専用道路を思い切って増やしてはどうか
- マンションにも充電スタンドがないと電気自動車（EV）に買い替えにくい。（戸建と異なり個人で対応が難しいので）設けるようにしてほしい
- 駅前に野菜スタンドを設けるなど、身近で地域の野菜を買えるようにしてほしい
- ソーラーパネルをカーシェアリングの施設に付け、できた電気をEVで使えるようになるとうい
- 自転車置き場がお店に少ないので増やしてほしい
- 里山を「守ろう」というと後ろ向きな感じがするので、増やす方向で考えていきたい
- 興味がない人でもいつの間にか貢献できる仕組み例として、街中のゴミ箱が必要な場所にあり日常や町に溶け込んでいれば自然に分別・リサイクルに貢献できるようにする
- 地産地消の推進では、地元の有機栽培の野菜などをスーパーで分かるように売る

[西地区]

- 西地区は、ベルーナドーム、狭山湖、お茶などが「点」として存在している。この現状を伸ばしていき、点を「線」で結ぶ将来像にする。現在は線に当たる道路が非常に貧弱であり、車中心の道路なので歩道が狭く、通学路もないような状態である。緑はあるが子育てするための遊び場が少ない。ポテンシャルはまだまだある
- 重要なのは教育である。実際に知る必要があるのは学生だけではないため、学校だけでなく学習塾やスポーツクラブなどに学びの場を広げていく
- 公民館など誰もが使う場所での情報発信が大切である。自主的に情報に接することが教育である
- 一つ一つ・一人一人の取組では効率が悪いので、まとまった行動・取組を積極的に行う
- 広い面積を持つベルーナドームの屋根を全面ソーラーパネルにする
- 駅の利用者向けに朝市や夕市で地元の物を売ると地産地消に貢献できる
- スーパーから遠い団地を対象とした移動スーパーがあると個々人が移動するより効率がよい

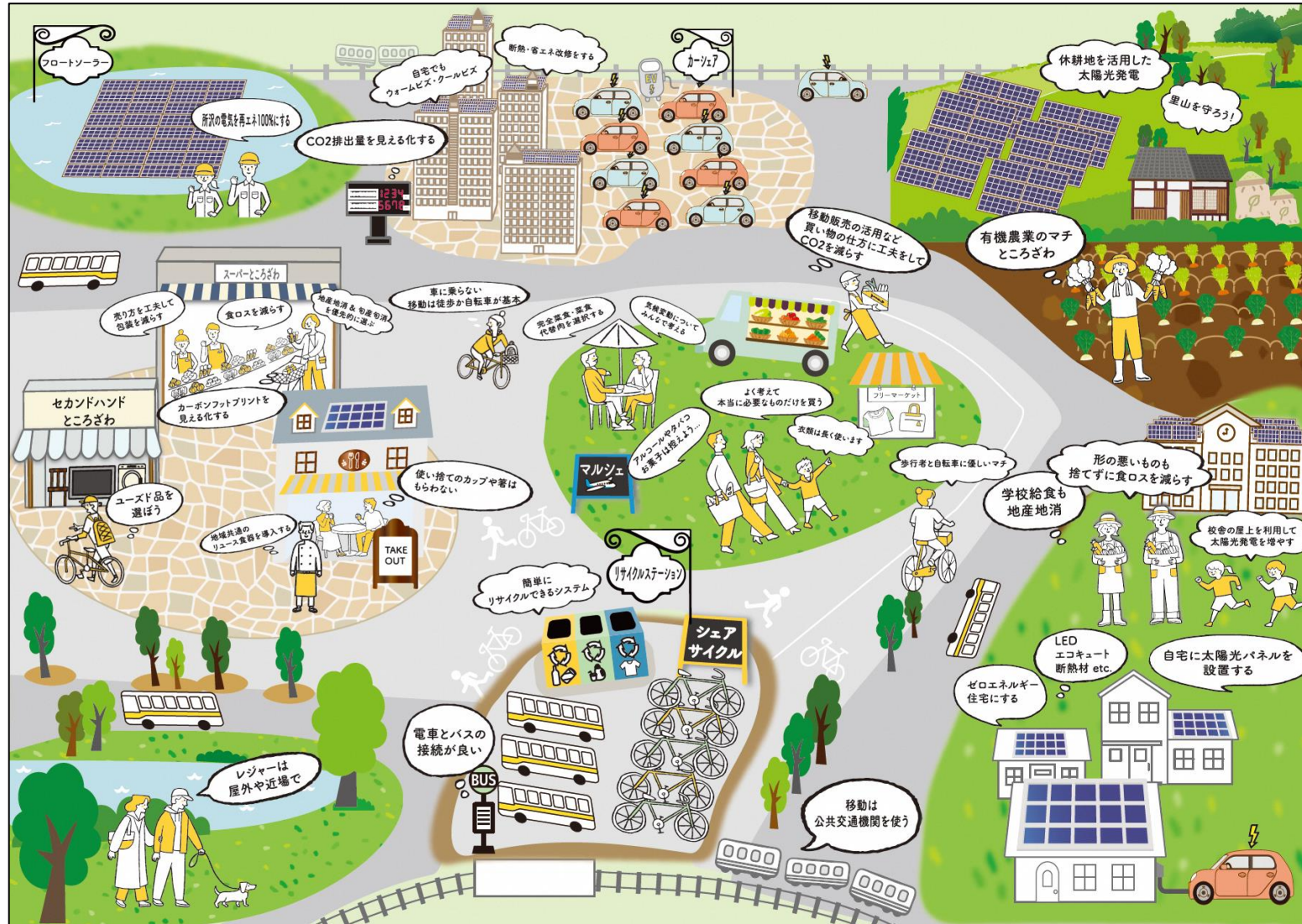


図 4-1 マチごととゼロカーボン市民会議での対話を踏まえて作成したマチごととゼロカーボン将来像(ベース)



図 4-2 マチごとゼロカーボン市民会議での対話を踏まえて作成したマチごとゼロカーボン将来像

(7) ワーク 2 『対策アイデアの整理』

ワーク 2 では、各自が住む地区でどのように対策を進めていくかについて対話を行った。ここでは模造紙を使って「縦軸：取組時期（中期的⇔今すぐ・既に）」と「横軸：日常生活の変化の大きさ（容易⇔障壁を伴う）」の二軸による四象限図を作り、28 の投票項目（施策）が印刷された付箋をふさわしいと思う位置に貼り付けていく形とした。

ワークは、「①投票した施策案を確認⇒②施策案の重要性について対話⇒③施策案を模造紙に貼る⇒④全体共有」という 4 段階で進めた。

①及び②では特に「それぞれの地区での日常生活」を踏まえた対話を行うことに重点を置き、司会者からも、地区や世代によって考え方の傾向が異なる場合があることを投票結果のグラフを用いて例示した。③では、地区の特徴に関する対話を反映させて全 28 の付箋を優先度の高いと思われるものから模造紙に貼り付けた。



(8) ワーク 2 『対策アイデアの整理』 発表

グループワーク後、全グループが「地区の特徴を踏まえて重要視する施策」を中心に、全体に向け以下のような発表を行った。（資料 3 P123 参照）

〔西地区 1〕

- 付箋は図の左下（すぐ取り組める・容易）に集中した。リユース・リサイクル商品の促進（施策 2）や緑を増やす（施策 17）など、CO₂ の発生抑制や吸収が基本的コンセプトである
- 図の右上（中期的・障壁を伴う）は再生可能エネルギー関係の意見（施策 10・12・14）で、これにより CO₂ の発生をなるべく抑える
- 最終的には教育が大事である。未来の子どもたちがしっかりと学び、生活の中から CO₂ を少しずつ減らすことで、所沢・世界をよくしていくことになると思う
- 図の左上（中期的・容易）は意見が非常に出にくかった
- 自家用車を使わなくていいまちづくり（施策 20）は、取り組みやすさはあるが非常に壮大ですぐには実現できない。取組は必要だが、最終的なゴールは先になるという意見だった

〔西地区 2〕

- 図の左下（すぐ取り組める・容易）が最も多く、教育を通じた連携（施策 25）、容器包装（施策 1）、リユース・リサイクル（施策 2）などが挙がった
- 省エネ型ライフスタイル（施策 16）、マチごとゼロカーボンを協働で進める体制づくり（施策 28）、自転車・徒歩の移動促進（施策 18）については意見が割れた。車や徒歩移動が多い地域であることも関係している
- 図の左上（中期的・容易）は市民活動促進（施策 13）のみ、右上（中期的・障壁を伴う）

は道路整備（施策 23）、地域の再エネ設備設置（施策 14）となった

[中央地区 1]

- 図の左下（すぐ取り組める・容易）では、食品ロス削減（施策 7）、教育を通じた連携（施策 25）等が挙げられた。このうち地域での連携に関する施策（施策 24・26・27・28）に関して、月 1 回カフェ会を設けて情報共有している自治会もある
- 高齢化で機能していない自治会も多いが、よくやっている自治会から情報がそちらに流れていくとよい
- リユース・リサイクルの促進（施策 2）に関しては、不用品を集めて得たお金をインフラ整備等に充てるという意見が出た
- 図の右上（中期的・障壁を伴う）に関し、まちに緑を増やすこと（施策 17）は簡単そうだが、マンション等では場所が限られるし、壁面緑化も時間がかかるなどで難しいのが現状ではないかという意見が出た

[中央地区 2]

- 28 の施策を一つずつ判断し配置していったところ、右上（中期的・障壁を伴う）には企業や行政の協力が必要で個人では始められないこと、左下（すぐ取り組める・容易）には個人の意識次第ですぐ始められること、という共通点が見受けられた
- 中央地区では徒歩・自転車移動の促進（施策 18）は既によくできている。一方で、CO₂の「倉庫」となり得る緑を増やす（施策 17）のは、中央では土地に余裕がなく難しいのではないか。これについて、駐車場を芝生にするという意見が出た。現在あるものを有効利用し、今できることから進めていくのがよい

[東地区 1]

- 優先的に取り組むべき項目として、移動と教育・啓蒙に関するものが挙げられた
- 新しく設備を作らなくても呼び掛けによってゼロカーボン達成に近づけるもの、エネルギーに関する市民活動（施策 13）、コミュニティの取組促進（施策 27）、自転車・徒歩での移動（施策 18）やバス利用（施策 19）などが左下（すぐ取り組める・容易）の近くに集まった
- 所沢市の東方面は自動車がないと生活できないのに自動車での移動が不便な所も多い。渋滞や入り組んだ道路などが理由で CO₂が発生しているため、道路整備により輸送の効率化や移動時間の削減が進むとよい

[東地区 2]

- 図の左下（すぐ取り組める・容易）には、自転車・徒歩での移動促進（施策 18）など個人が意識すれば簡単にできる施策が集まった
- 図の右下（すぐ取り組める・障壁を伴う）は、コミュニティでの取組促進（施策 27）など地域でないと難しいこともある。例えば町の中心に自動車で行く場合、買い物額に応じて無料駐車券をもらえるが、自転車の場合はそれが無い。（駐輪場や無料券の）導入は個人では難しく、インフラや初期費用についてステークホルダーの理解が必要になる
- 図の右上（中期的・障壁を伴う）は関係先と調整しながら年月をかけて理解を進める必

要がある。これに関し、マチごとゼロカーボンを協働で進める体制（施策 28）は非常に大切だが、30年後（中期的）ではなくできることから始めた方がいいため、「すぐ取り組める」のエリアに置いた。一步踏み出すことが大事である

(9) チェックアウト

全 5 回の会議の内容を取りまとめた報告書の作成及び審議会提出に向けた予定等について説明した。その後、グループ内で感想を述べ合い、各地区から 1 名が全体に向けて発表した。

(10) 講評（藤本市長）

藤本市長より挨拶と講評があった。概要は以下のとおり。

5 回にわたり色々な提案をいただきお礼申し上げます。去年 1 月頃に市民会議の実施を決めた際、市議会と執行部は環境という共通のテーマに向かい共に前を見て進まなくてはならず、そのためには市民から直接意見を聞いて審議会に提出することで皆の賛同を得られると考えた。

この度集まっていたいただいた皆さんは、最先端の話聞きながら、2030 年～2050 年について自分事として頭を悩ませてくれたことと思う。皆さんからいただいた意見はとても大切な宝物としてこれから審議会に提出、議論され、審議会が提案してくれるルートを通っていくことになる。

私は実はこの会議が終わらないでほしいと思っている。仲間もできたのではないだろうか。ネットワークは非常に大切で、力が溢れてくるし、色々なことが生まれてくるので、できれば仲間を残してほしい。今、市職員は「脱炭素」と「人を中心にしたマチづくり」に向けて皆さんと同じ気持ちで進もうとしている。ぜひこれからも力を貸してほしいし、職員を叱咤激励してほしい。この度の仲間が仲間のままで、もっと大きなうねりになることを切に願っている。

(11) 閉会

感謝状の贈呈及び参加者アンケートを実施し、最後に記念撮影を行い全 5 回の市民会議を終了した。

第3章. 投票結果

（投票項目の作成方法）

投票項目は、ゼロカーボンに関する対話から出されたアイデア（グループワークで模造紙に貼られた約2,000枚のポストイット）を再度事務局にて1枚1枚確認し、内容を精査したうえで、テーマ毎に5件程度、計28項目を設問として決定した。各項目の記述はポストイットの言葉を踏襲する形で、なるべく多くの意見を反映できるよう工夫して作成した。（資料5 P144 参照）

（回答方法）

28項目について「①全く推進すべきでない」から「⑤積極的に推進すべき」までの5段階の意見と「⑥わからない」の6つの選択肢の中から自分の考えに近いものに回答いただいた。また、テーマ毎に最優先と考える施策を1つ選択いただいた。

なお、各設問について自由記述欄を設け、その選択肢を選んだ理由等をご記入いただいた。

（回答状況）

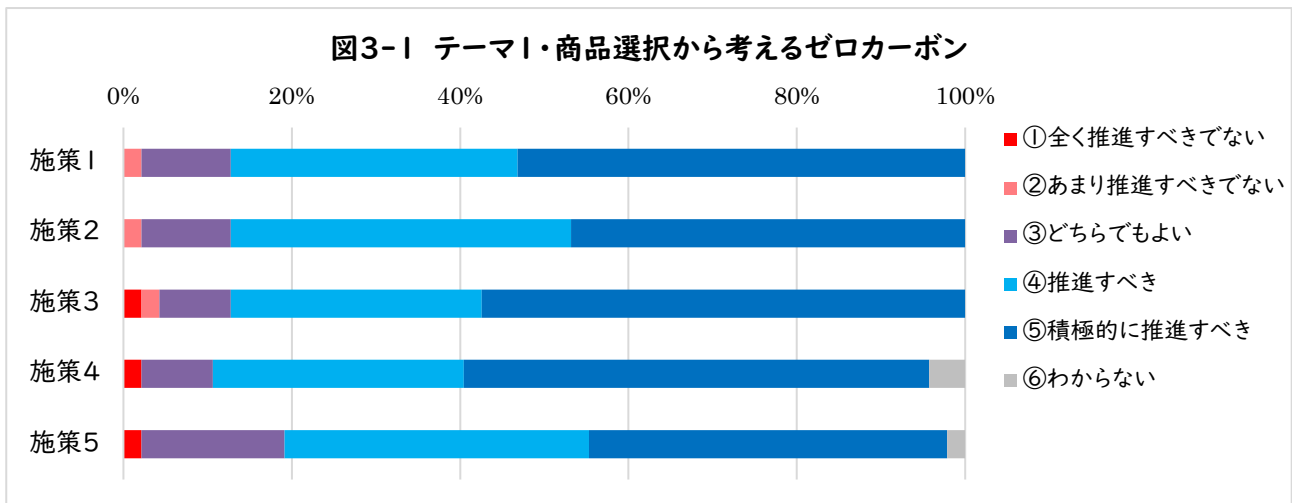
回答者数 47名（内訳：Web 41名・郵送 6名）

（参加者 51名 回答率：92%）

テーマ1『商品選択から考えるゼロカーボン』

最優先施策支持率

施策1	容器包装および使い捨てプラスチックの削減を促進する	36.2%
施策2	リユースやリサイクルを促進する	8.5%
施策3	カーボンフットプリントを踏まえた商品選択を促進する	21.3%
施策4	ゼロカーボン促進のために経済的インセンティブ（動機付け）を強化する	23.4%
施策5	所沢ゼロカーボン認証（仮）を導入し積極的な店舗に認証ラベルを付与する	10.6%



テーマ1「商品選択から考えるゼロカーボン」では、施策1「容器包装および使い捨てプラスチックの削減を促進する」が最も支持され、施策1に関する自由意見では、選択肢別に下記のような内容が寄せられた。

[⑤積極的に推進すべきを選択]

- 食品購入が一番身近であり、影響が大きいと思います。
- （ペットボトルが市場に現れたとき、いずれは「問題になる」と思われていたのに現在に至っています）量り売り、詰め替えの選択肢はもともと消費者にあったのだから、市場から消費の選択を無くしただけだから大丈夫！！

[④推進すべきを選択]

- 関係するキーワードすべてに対して同じ意見ではありません。量り売り・裸売りなどは、現在の生活を考えると非現実的にも思えます。

[③どちらでもよいを選択]

- 所沢市のみで推進できる事柄では無く、流通される範囲全ての地域に関わることから。

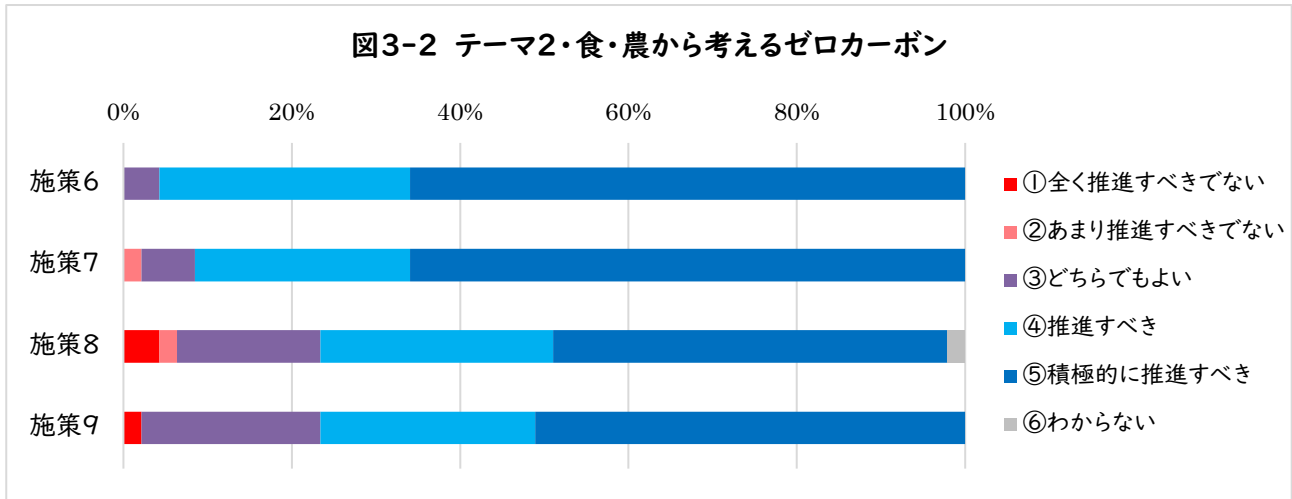
[②あまり推進すべきでないを選択]

- CO₂削減効果は小さく、イノベーションにつながる要素も少ないように思える。一方、企業は自社のイメージダウンを避けるために取り組まざるを得ない。企業・消費者双方にとってデメリットの方が大きい施策にみえる。

テーマ2『食・農から考えるゼロカーボン』

最優先施策支持率

施策6	農産品の地産地消及び旬産旬消を促進する	27.2%
施策7	食品ロスを減らす	42.6%
施策8	ごみの堆肥化と活用	14.9%
施策9	食と農への理解を深める取組を推進する	14.9%



テーマ2「食・農から考えるゼロカーボン」では、施策7「食品ロスを減らす」が最も支持され、施策7に関する自由意見では、選択肢別に下記のような内容が寄せられた。

[⑤積極的に推進すべきを選択]

- 施策の進め方は、どこで発生している食品ロスに焦点をあてるかによる。塵も積もれば的的な施策で家庭に重点を置くより、まずは1件当たりの食品ロスが大きい事業者側に働きかける方が成果につながりやすいように思える。
- 家族がコンビニで働いているのですが、毎日凄い量の廃棄が出て、そのまま捨ててしまっていると聞いている。賞味期限が切れてしまっているのも再利用も衛生的には厳しいと思っています。規格外野菜は困っていると、JA納入分以外にももう少し稼ぎたい農家さんと企業とかお店とか地域のスーパーとかのお見合い企画とかすれば新しい活用法が生まれるかも。

[④推進すべきを選択]

- 飲食店での食品ロス削減策は効果大きいと思う。
- コンビニやスーパーですでに実施している。

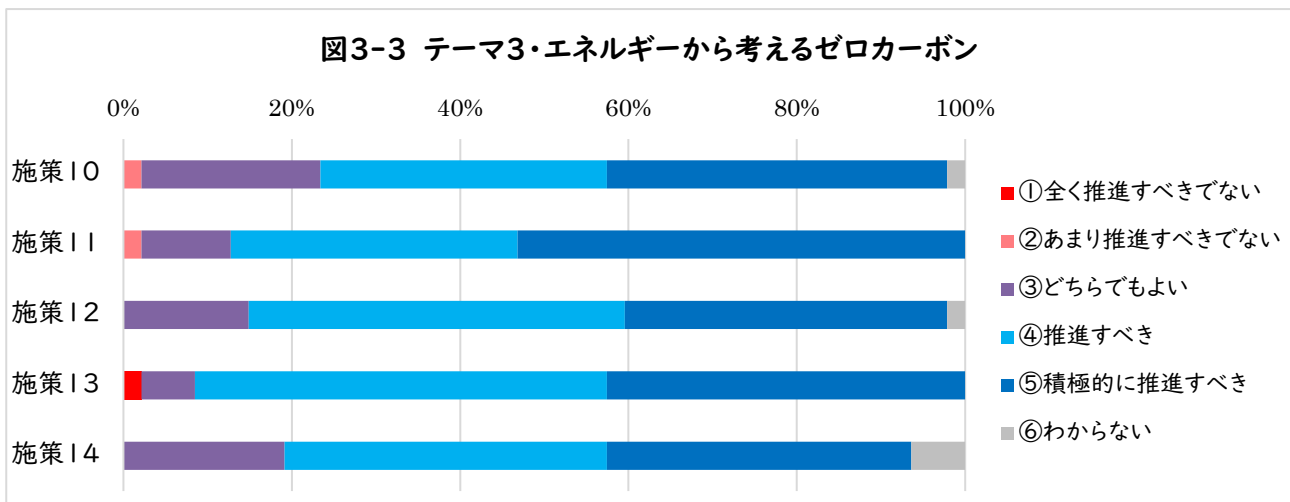
[③どちらでもよいを選択]

- 主旨は理解するが、推進できるイメージがわからない。やる人はやってる。やらない人はやらない類。

テーマ3『エネルギーから考えるゼロカーボン』

最優先施策支持率

施策	内容	最優先施策支持率
施策10	家庭向け太陽光発電を促進する	17.0%
施策11	地域における再エネ設備の設置を促進する	40.4%
施策12	再生可能エネルギー比率の高い電力（再エネ電力）への切り替え促進	4.3%
施策13	エネルギーに関する市民活動を促進する	23.4%
施策14	（株）ところざわ未来電力の利用拡大に努める	14.9%



テーマ3「エネルギーから考えるゼロカーボン」では、施策11「地域における再エネ設備の設置を促進する」が最も支持され、施策11に関する自由意見では、選択肢別に下記のような内容が寄せられた。

[⑤積極的に推進すべきを選択]

- 今後商業施設などには、太陽光パネルの設置義務化と補助金の検討をするべき。
- 市の施設から始め、所沢市内で影響力のある企業にも参加・協力してもらう。

[④推進すべきを選択]

- 義務となると難しいし、誘致が難しくなるのでは。
- 西武グループなど付き合いのある民間企業と上手く話がまとまれば、ぜひ大口設置してほしいと思います。市全体がエコな街という印象になっていくとうれしいです。

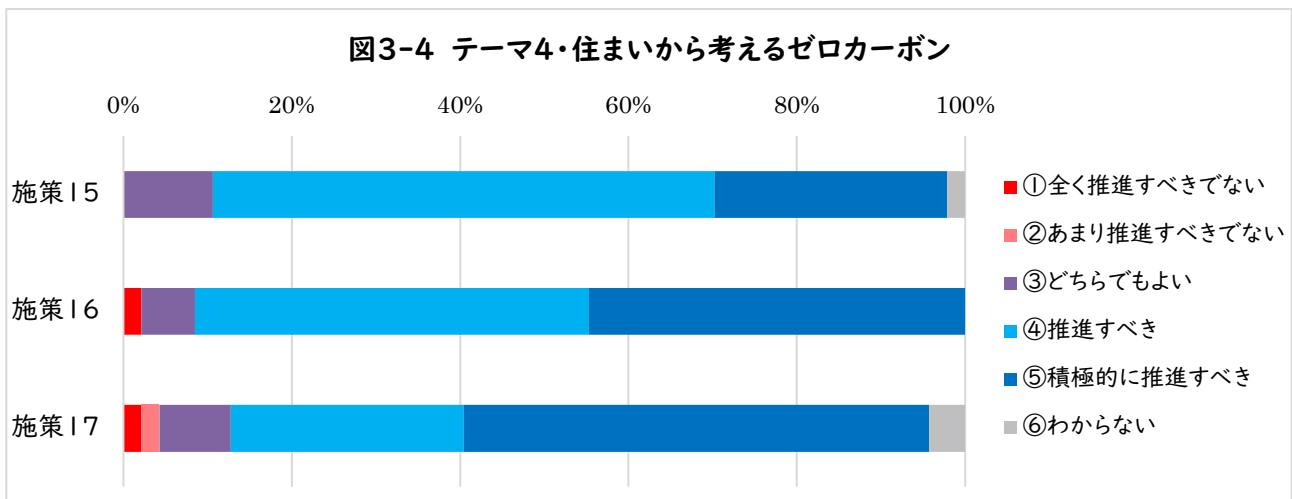
[②あまり推進すべきでないを選択]

- 必要以上に再エネ施設が増えたり、生活環境が変わったりする恐れがあるので慎重に事を進めるべき。

テーマ4『住まいから考えるゼロカーボン』

最優先施策支持率

施策15	機器・設備などの省エネ化を促進する	25.5%
施策16	住まい・暮らしでの省エネ型ライフスタイルを促進する	27.7%
施策17	まちに緑を増やす	46.8%



テーマ4「住まいから考えるゼロカーボン」では、施策17「まちに緑を増やす」が最も支持され、施策17に関する自由意見では、選択肢別に下記のような内容が寄せられた。

[⑤積極的に推進すべきを選択]

- 緑を多くすることで、街が変わればいい。公的機関が、どれだけ先陣を切って取組ができるか。
- 課題に「車いす等未舗装道路を利用しづらい方への配慮」とありますが、逆にそこをクリアした未舗装道路を開発できれば、市の印象は格段に上がると思います。やるのであれば半端なものではなく、ぜひ徹底したクオリティの道路を敷いてほしいです。実現すれば住みたい人が増えると思います。

[④推進すべきを選択]

- 大規模マンション、商業施設を作る際には緑化を義務化する。

[②あまり推進すべきでないを選択]

- 整備やメンテナンスの頻度、バリアフリーのことを考えると懸念が残る。

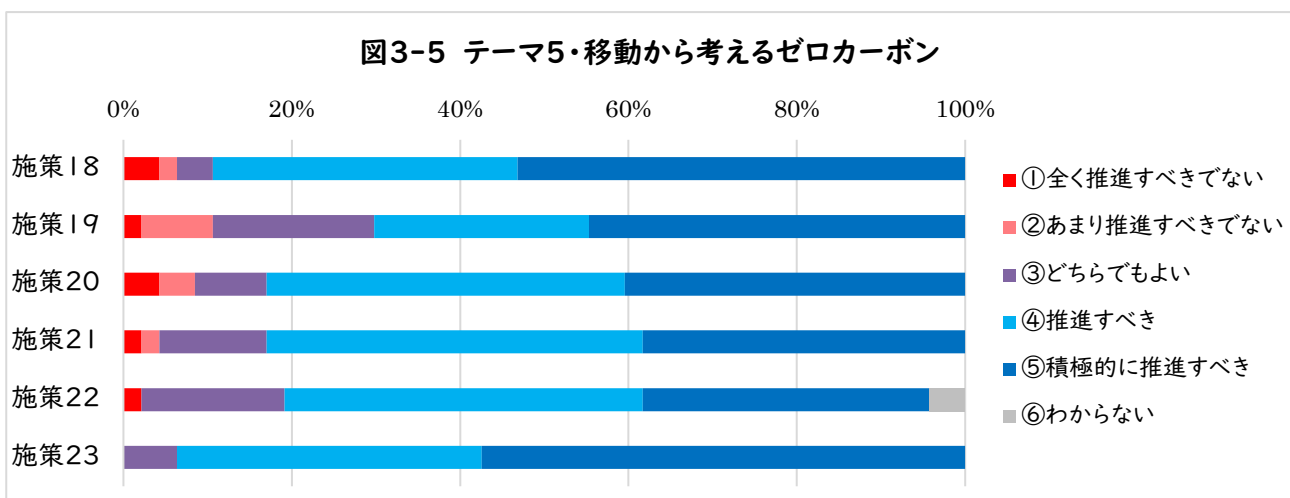
[①全く推進すべきでないを選択]

- アスファルトの芝生化は不便なのでやらない方がいい。

テーマ5『移動から考えるゼロカーボン』

最優先施策支持率

施策 18	自転車・徒歩での移動を促進する	17.0%
施策 19	バスの利用を促進する	12.8%
施策 20	自家用車を使わなくてもよいまちづくり	17.0%
施策 21	エコ車両の利用とエコドライブの促進	12.8%
施策 22	輸送の削減と効率化を図る	4.3%
施策 23	自転車や徒歩でも安全に通行できる道路整備を進める	36.2%



テーマ5「移動から考えるゼロカーボン」では、施策23「自転車や徒歩でも安全に通行できる道路整備を進める」が最も支持され、施策23に関する自由意見では、選択肢別に下記のような内容が寄せられた。

[⑤積極的に推進すべきを選択]

- これはぜひ、推進してもらいたい。ただし、車の利用者にとってデメリットが発生しないよう工夫する必要があると考える。
- クラウドファンディング案件。安全にもつながるし重要。街の魅力も向上する。お金を出します。
- 本当にお願いします！切実にお願いします。道が広がりきれいになれば、家の周りの施策18から22までは連動的に解決すると思う。

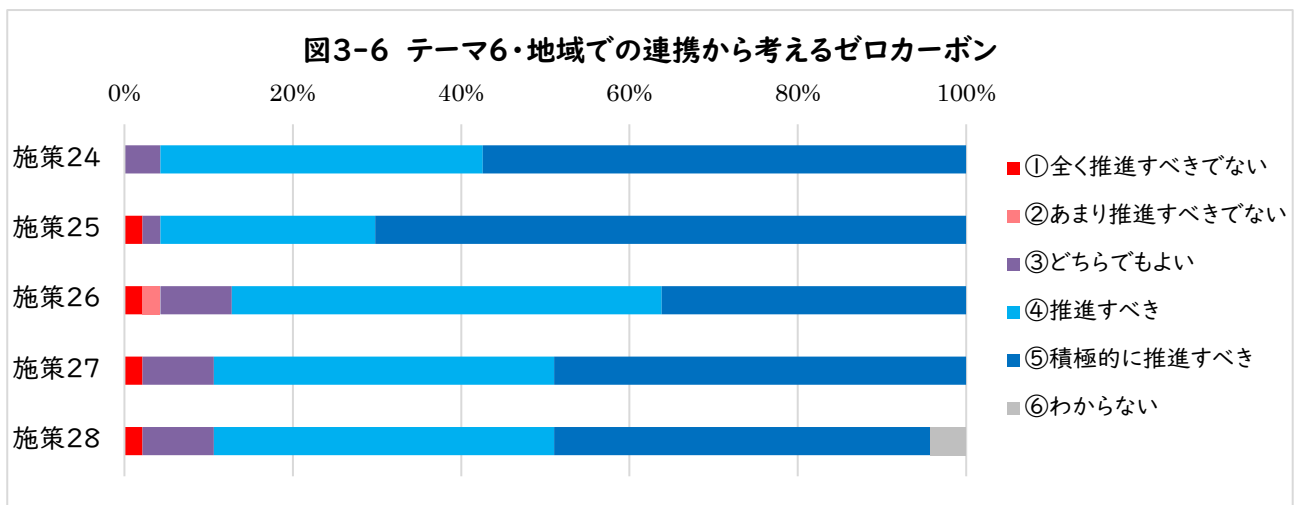
[④推進すべきを選択]

- 整いつつあると思いますが、安心して歩ける・自転車が走れる 道路作りは今後も続けていく必要があると思います。
- 道路整備と、ゼロカーボンがどのようにつながるのか周知が難しい。

テーマ6『地域での連携から考えるゼロカーボン』

最優先施策支持率

施策 24	地域の連携をまちづくりに生かす	17.0%
施策 25	教育を通じた連携を促進する	38.3%
施策 26	地域連携でゼロカーボンへの取組や活動を広報する	14.9%
施策 27	コミュニティでの取組を促進する	6.4%
施策 28	まちごとゼロカーボンを協働で進める体制を作る	23.4%



テーマ6「地域での連携から考えるゼロカーボン」では、施策25「教育を通じた連携を促進する」が最も支持され、施策25に関する自由意見では、選択肢別に下記のような内容が寄せられた。

[⑤積極的に推進すべきを選択]

- 参加をどうやって促すかが、課題となりそうだが、大人単体では参加しづらい（家族を放っておけない）が、子どものイベントや、行事への参加は前向き捉えられ、近年は参加率も高いと考える。そのあたりに組み込めると良さそう。
- 子どものうちから学習することが、将来に渡りゼロカーボンを推進する最大の原動力と考える。
- 社会の分断や間違った同調圧力の高まりにつながらないように、細心の注意を払う必要がある。

[④推進すべきを選択]

- 子どもが率先してやることにより大人として恥ずかしい振る舞いが出来なくなり、結果的に大人にも浸透する。

[①全く推進すべきでないを選択]

- 私が小学生のころ、総合の時間に学んだことはあまり覚えてないので、有効ではないのではないかな。

[全体の集計結果（散布図）]

【横軸：平均点】投票結果の支持度に重みづけをするため、①～⑤の各選択肢に以下のとおり配点して各回答数に乘じ、その合計値を全回答数（「⑥わからない」は除く）で除した数を「平均点」としました。この数値が大きいほど施策に対する全体的な支持度が高いことを示しています（最大値：5.00）。

【配点：①全く推進すべきでない＝1点、②あまり推進すべきでない＝2点、③どちらでもよい＝3点、④推進すべき＝4点、⑤積極的に推進すべき＝5点】

【縦軸：標準偏差】施策に対する参加者の意見（選択）の散らばり具合を示しています。数値が0に近いほど参加市民の選択がまとまっており、数値が大きいほど個々人の選択が分かれていることを意味しています。

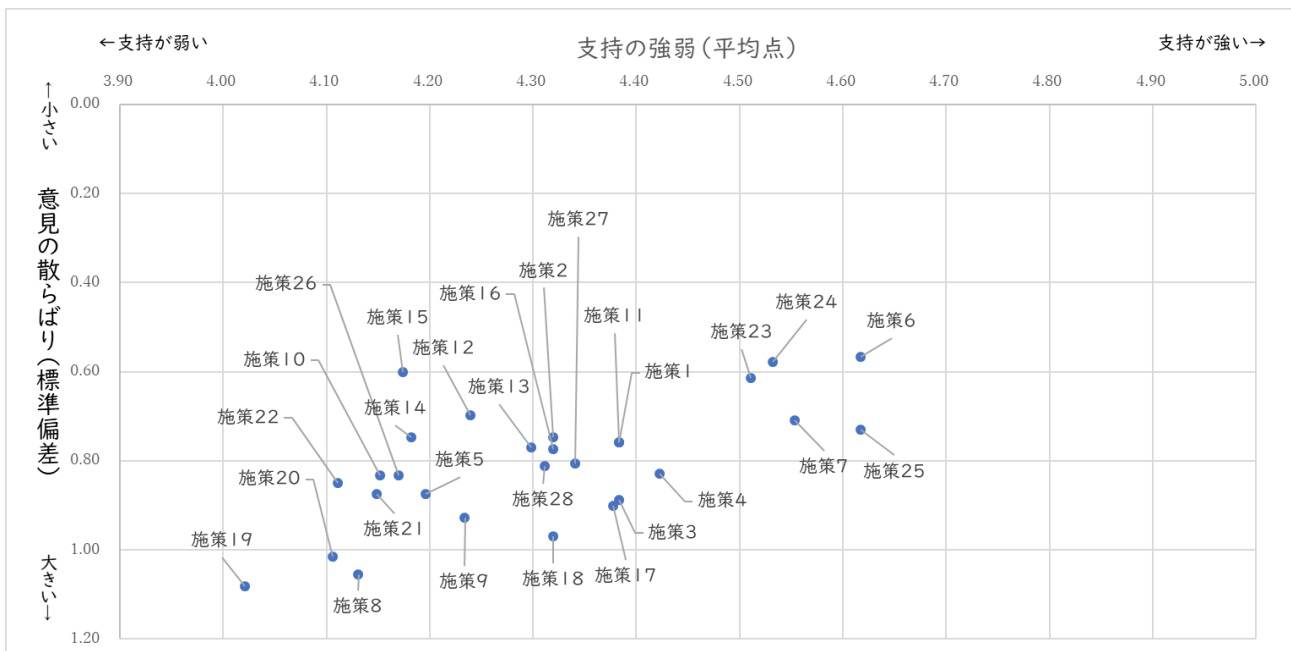


図 3-7 投票結果の散布図

全体では最も支持が強く、意見の散らばりが少なかった項目は施策6「農産品の地産地消及び旬産旬消を促進する」でした。逆に最も意見の散らばりが大きかった項目は施策19「バスの利用を促進する」という結果となりました。

(参考：投票項目一覧)

テーマ1『商品選択から考えるゼロカーボン』

施策1.容器包装および使い捨てプラスチックの削減を促進する

施策2.リユースやリサイクルを促進する

施策3.カーボンフットプリントを踏まえた商品選択を促進する

施策4.ゼロカーボン促進のために経済的インセンティブ（動機付け）を強化する

施策 5.所沢ゼロカーボン認証（仮）を導入し積極的な店舗に認証ラベルを付与する

テーマ2『食・農から考えるゼロカーボン』

施策 6.農産品の地産地消及び旬産旬消を促進する

施策 7.食品ロスを減らす

施策 8.ごみの堆肥化と活用

施策 9.食と農への理解を深める取組を推進する

テーマ3『エネルギーから考えるゼロカーボン』

施策 10.家庭向け太陽光発電を促進する

施策 11.地域における再エネ設備の設置を促進する

施策 12.再生可能エネルギー比率の高い電力（再エネ電力）への切り替え促進

施策 13.エネルギーに関する市民活動を促進する

施策 14.(株)とところざわ未来電力の利用拡大に努める

テーマ4『住まいから考えるゼロカーボン』

施策 15.機器・設備などの省エネ化を促進する

施策 16.住まい・暮らしでの省エネ型ライフスタイルを促進する

施策 17.まちに緑を増やす

テーマ5『移動から考えるゼロカーボン』

施策 18.自転車・徒歩での移動を促進する

施策 19.バスの利用を促進する

施策 20.自家用車を使わなくてもよいまちづくり

施策 21.エコ車両の利用とエコドライブの促進

施策 22.輸送の削減と効率化を図る

施策 23.自転車や徒歩でも安全に通行できる道路整備を進める

テーマ6『地域での連携から考えるゼロカーボン』

施策 24.地域の連携をまちづくりに生かす

施策 25.教育を通じた連携を促進する

施策 26.地域連携でゼロカーボンへの取組や活動を広報する

施策 27.コミュニティでの取組を促進する

施策 28.まちごとゼロカーボンを協働で進める体制を作る

第4章. まとめ

1. 成果について

1-1. 当初の目的に対する成果

市民会議の目的は「参加者一人ひとりが地球温暖化問題を自分事として捉え、議論することで、問題意識を共有するとともに、会議結果を所沢市マチごとエコタウン推進計画の改定及びゼロカーボンシティ実現に向けた施策に繋げる」こととしており、その目的に対する成果を以下のとおり整理した。

(1) 参加者一人ひとりの地球温暖化問題の自分事化と問題意識の共有

当会議は無作為抽出で参加者を募ったことで、参加者の環境に関する知識量や環境配慮行動の実践度については大きなバラツキがあった。環境に関心が高く、普段から情報収集し行動している市民もいれば、関心があまりないまたは全くないという市民も多く参加していた。

しかし、市民会議での話題提供や参加者同士の対話を通して、地球温暖化に対する問題意識を共有することができたものと思われる。事前アンケートでは環境行動を「実践していない」と回答した参加者は19.6%だったのに対し、第5回後のアンケートでは「実践していない」と回答した参加者は0%となり、実践していなかった参加者全員に行動変容がみられた。

また、自由意見でも「全5回をとおしてカーボンニュートラルに理解が深まったため、行動していきたい」など、地球温暖化問題を自分事化する声が多数寄せられ、本目的は達成できたものといえる。こうした市民参加型の会議などが、市民の行動変容に有効であることが分かった。

(2) 所沢市マチごとエコタウン推進計画への反映

市は会議結果を「マチごとゼロカーボン市民会議報告書（速報版）」としてまとめ、2023年2月に開催された審議会に提出し、計画への反映に向けた審議がなされたところである。計画改定は2024年3月頃を予定しているが、今後、この報告書をもとに、計画改定への反映について更なる審議がなされる予定である。

市民会議の結果が審議会に提出され、市の計画改定に向けた議題として直接審議されることは、他の自治体で行われた気候市民会議では例のないことであり、全国に先駆けて自治体が主催したことの大きな成果といえる。

(3) ゼロカーボンシティ実現に向けた施策に繋げる

市は「所沢市脱炭素社会を実現させるための条例」を令和5年3月に制定した。条例には、市民会議で出された意見を取り入れ、再生可能エネルギーの普及促進、省エネの推進、環境物品への需要の転換など、ライフスタイルの転換について、市・事業者・市民がそれぞれ取り組むべき責務を規定した。

また、この条例の施行にあわせて、令和5年度からは「初期費用ゼロ円太陽光推進補助金」を新たに創設し、家庭等に初期費用ゼロ円で太陽光パネルの設置を促進する補助事業を始め

た。その他、行政だけでなく事業者や市民を巻き込み市全体に新たなムーブメントを起こすことを目的として、事業者の脱炭素経営を促す「(仮称) マチごとゼロカーボン推進事業者連絡会」の立ち上げや、市民啓発のための「ゼロカーボンをテーマとしたシンポジウム」の開催を予定している。

今後、市は会議結果をもとに、ゼロカーボンシティ実現に向けた既存施策の見直しや新たな施策を展開していくこととしている。

1-2. その他の効果

「マチごとゼロカーボン市民会議」をとおして、以下のような効果もあった。

(1) 新たなコミュニティの形成（参加者同士の繋がり）

全 5 回をとおし、回を重ねるごとに参加者同士のコミュニケーションが深まった。会議だけでなく休憩時間の交流により、第 1 回ではグループファシリテーターが促さなければ参加者同士の対話は生まれなかったが、第 5 回では自然と参加者間で対話がなされていた。同じ目的を共有し対話をする中で参加者同士に一体感や繋がりが生まれたものと思われる。

また、会議外の時間に情報交換する様子も見受けられ、環境問題を通じた市民同士の自主的な取組が広がることに期待できるものとなった。

(2) 職員のファシリテーション能力向上

市民会議では各グループでの対話を促すため、グループ毎に市の職員をファシリテーターとして配置した。全 5 回を通して、職員のファシリテーション能力やコミュニケーション能力の向上が見受けられ、今後、様々な業務において当会議で身に付けた能力を活用できるものとなった。

(3) 官学連携について

設計の段階から会議の運営についての細部に至るまで、早大と市で協議を重ねて市民会議を開催したことにより、特にグループワークの手法等の会議の進め方や会議結果のとりまとめ方に関して、早大の豊富な経験や知見を活かすことで開催することができた。

今後、市民会議の結果から、早大は更に地球温暖化に関する市民の行動変容について研究を進める予定であり、その研究の成果を市の政策形成に生かしていくことで、市民へフィードバックしていくことも想定している。

今回の市民会議は早大との連携がなければ、成しえなかった事業であり、今後の官学連携のモデルケースとなったといえる。

2. 課題について

(1) 意見の多様性

市民会議を運営するにあたって最も重視したことは、参加者の自由な意見を保証し、多様な意見を引き出すことであった。

参加者には知識に大きな差があったが、知識を有する者の声が大きくなり、知識が少ない者が発言しづらくなる雰囲気支配されてしまうことを懸念していた。参加者の性別、年齢、居住エリア、生活スタイル、家族構成、生活環境といったことだけではなく、知識のない参加者の意見も大切にするといった多様性も重要であると考えていたからである。

自由な発言ができるよう、各テーマの前半に専門家等による話題提供をしたが、参加者によってはその内容が難解であったり、かえって話題提供の内容に発言が引っ張られてしまったりという傾向が見られたのも事実であった。

また、参加者が一つのテーブルで安心して対話できる環境を作ることが最も苦慮した課題であり、現場では司会者とファシリテーターの力量が一番重要であった。

(2) 意見のとりまとめ

次いで、大きな課題となったのは、会議で参加者から出された意見のとりまとめであった。市民会議に出された意見を審議会に意見を提出することが目的の一つであったが、参加者からは2,000を越える意見が出された。この大量な意見をそのまま「これが市民会議の結果です」と審議会に提出することは現実的ではないことから、そうした意見をテーマ毎にある程度のまとまりに分類したうえで、傾向を出すために、アンケート形式の投票という形をとった。しかし、この分類して傾向を出すことが、少数意見を軽視することにつながるのではないか？というジレンマが付きまとい、分類の仕分けや傾向の出し方も大きな課題であった。

本来、少数意見を含めて多様な意見を尊重することを最も重要な課題と捉えていたことから、本報告書の取扱いに当たっては、多数意見だけでなく、その施策に対して反対するような少数意見にも着目することも重要であると考えた。

(3) 今後の課題

最も重要な課題は、この市民会議の結果を受けて、今後どのように市の施策を実行していくかということである。

前述したとおり、環境審議会ではこの会議結果をもとに審議がなされ、市の環境基本計画へ反映される予定である。また、市民会議で出された意見を取り入れて「所沢市脱炭素社会を実現するための条例」を令和5年3月に制定したところである。

こうした計画の策定や条例の制定はゴールではなく、地球温暖化対策の第一歩に過ぎない。今回の市民会議の結果を重く受け止め、引き続き市民の声に耳を傾けながら、具体的な施策を実行していくことが最も重要な今後の課題となった。

3. まとめ

国内で初めて自治体主催の気候市民会議として開催した「マチごとゼロカーボン市民会議」。前例が少なく試行錯誤の繰り返しであったともいえる。「限られた時間の中で、参加者は自分の考えを発言ができたのか？成熟した対話ができているのか？」といったことを自問自答しながら手探りで全5回を開催してきた。それでも、ほとんどの参加者が脱落することなく、全5回の会議に参加をしていただくことができた。また、第5回終了後のアンケートでは「対話がしやすい雰囲気だった」という設問に対して、「とてもあてはまる：78%」、「ややあてはまる：18%」という結果であったことから、対話のしやすさについては、参加者に一定の満足感があったものと考えている。

また、全5回の会議をとおして、地球温暖化対策を進めていくことに異論を唱えた参加者や、自分や身近な人だけがよければ、あとはどうなってもよいという参加者は皆無であった。そして、参加者すべての人が、自分を含めたあらゆる立場の人が協力しあって地球温暖化対策をしなければならないことを前提に意見交換していたことが印象的であった。今回の市民会議が、あらゆるステークホルダーが連携して地球温暖化対策へ取り組んでいくための大きな第一歩になったと考えている。

最後に、この市民会議が多くの方々に支えられて開催することができたことも書き添える。多忙な中、話題提供者として登壇していただいた研究機関、経営者、民間企業、市民団体の方々に加え、知見や経験をいかして協力していただいた早大の平塚准教授を始めとする学生の方々に感謝申し上げたい。また、仕事や学校があつたり、育児を誰かに頼んだり、なんとかか都合をつけて、自分の時間を割いて参加された参加者の方々にも改めて感謝申し上げます。



第5章. 講評（早稲田大学 平塚基志氏）

所沢市の「マチごとゼロカーボン市民会議」（以下、市民会議）には、司会として参加しました。しかし、実のところ、市民会議のお話をいただいてから数か月間は、市民会議が意味あるものになるという確信を持たずにいました。もともと欧州で始まった気候市民会議です。資料を読むとボトムアップで気候変動について対話するという意味は分かったのですが、それが個別具体的な対策（政策、施策、行動、その他）にどのようにつながるのかが私には見通せませんでした。つまり、ゼロカーボンにつながる道筋が見えませんでした。一方、従来の気候変動に関する国際合意やそれに基づく国レベルの対策（トップダウン）が効果的に進んでいるという感触もなく、市民会議を通してボトムアップで進めることの可能性を、市民、行政、そして大学で『探っていきたい』と考えるに至りました。

第1回目の市民会議の際、冒頭に以下のように申し上げました。そして、このことは全5回を通して常に意識していました。長いですが以下に記します。

「この『マチごとゼロカーボン市民会議』ですが、気候変動への対策を進めていくことは、参加者の皆さん、日本全国の皆さん、そして世界中の皆さんの共通認識ではないかと思います。一方、その共通のゴールに向けてどのように取組を進めていくかという設計図は、今でも明確ではないというのが実情です。ゴールに向けてどのように進んでいくかについては、男女によって違うかもしれません。職業によっても違うかもしれません。さらに、ゴールへ進もうとするスピードは高校生のような若い方々と高齢者で異なるかもしれません。そういった状況を踏まえて、どのようにゴールに向けて進んでいくかを『対話』を通して考えていくのがこの『マチごとゼロカーボン市民会議』です。とにかく意見を出し合っ、『ゴールにたどり着くまでの設計図の材料を出し合う』ことが会議の目的になります。」

そういう意識で臨んだ市民会議でしたが、全5回の市民会議を通して所沢市のゼロカーボン達成のために対話が進んだこと、そして気候変動への意識が大きく変化したことは模造紙に貼られたポストイットや会場の雰囲気から良く分かりました。私としては、第1回目に申し上げた『ゴールにたどり着くまでの設計図の材料を出し合う』という目的は果たせたのではないかと考えています。

さて、毎回の市民会議において、私は会議中だけではなく会議前や休憩中もお話を伺う機会が多くありました。その中で、とくに印象的だったのは1995年以降に産まれたZ世代と呼ばれる参加者の意見でした。いくつか挙げると、「気候変動への対策は自分ごとでもあり、かつ全員のことでもあることを理解すべき」、「これまでは意見を出す手段すらなかった。市民会議は貴重な機会になった」、そして「お年玉で省エネ家電を買おうと思っている」がありました。また、そうしたZ世代の意見を受けて、「高校生が本気で考えていることに驚いた」や「子や孫といった次世代のための行動が大事」という意見がその上の世代から出たこと、さらに世代を超えて具体的な対策を進める手段について対話が深まったことは想定を超えた成果だったと考えます。一方、「対話の時間が足りなかった」や「配布資料が多く紙がもったいない」という運営面への意見は反省点でした。そして、「居住地によっては移動手段が限定的である。そうした差異を考慮してはどう

か」や「商品を守る側の工夫も必要」という気候変動への対策を進めるにあたっての根本的な課題が浮き彫りになったことは、今後の市民、事業者、行政、大学等のアカデミアへの宿題だと受け止めました。加えて、世代を問わずいただいた意見としては、「継続して市民会議を開催すべき」というものがありました。一朝一夕には進まない気候変動への対策について、これは参加者及び関係者の共通認識だったと思います。

今後は市民会議で対話したことを所沢市のゼロカーボンに結び付ける必要があります。対話から多くのアイデアが出されました。それらを自分ごととして日常生活に取り入れていくこと、すなわち行動変容を進めていく必要があります。2023年度はゼロカーボンに向けた実証研究として次のフェーズに移ります。市民会議を基盤としたゼロカーボンへの取組の深化・面的拡大と一緒に考えていきたいと思えます。

最後に、日本では初めてとなる自治体主催の気候市民会議の開催を決断し、ボトムアップで気候変動への対策を進めることにした所沢市役所マチごとエコタウン推進課の皆さんに敬意を表します。そして、参加いただいた市民の皆さん、話題提供いただいた有識者の皆さん、ファシリテーター補助として参加した早稲田大学人間科学学術院のメンバーに感謝申し上げます。

